

## 月例研究会報告（1992年度～1999年度）

（開催月によって出席者の氏名，人数など不明の場合があります。出席者の敬称は省略させていただきます。1992年度，1993年度については、『図書館界』例会報告をもとに補足しています。）

### 1992年4月例会

日 時：4月25日（土）14時～17時

会 場：大阪市立中央図書館

テーマ：NDC 9版を考える - JLA分類委員会誌上報告を中心に - （総論）

発表者：野口恒雄氏（佛教大学図書館）

出席者：19名

わが国の標準分類法である NDC 8版が刊行されてから，すでに14年目に入ろうとしている。この間，JLA分類委員会は，1985年11月16日以来，70数回の会合を重ね，改訂作業も最終段階に来ている。改訂版（9版）試案の説明会も，今夏に予定されている。当グループは，NDCに対し，これまでもさまざまな批判や提言を行ってきた。試案の検討が急がれている。

試案は「国内刊行のすべての図書を網羅する全国書誌を適正に分類できること」を改訂の骨子とする。「全国書誌のデータベースに使用可能な書誌分類表」であり，「分類作業に役立つと同時にデータベースの検索に効果的な標準分類表であることを目指している。この新しい意味づけは，書架分類表としての性格を鮮明に打ち出した8版同様の誤りを犯しているようである。しかし「分類体系の継続性を考慮し，新訂8版の体系を維持」することも謳っている。したがって，記号の合成などが積極的に取り込まれているわけではない。8版の形式区分-04にあった相関係の表示（オプション）も排除する方向にある。列挙型分類表としてのNDCの構造を維持する範囲で，どのようにして書誌分類表としての充実を図ろうとするのであろうか。

各類目を通して，1)構造の明確化と明文化，2)分類実績が大量な項目の細分，3)名辞の吟味，4)

注記と参照の充実と手直し，5)当該類目の見直し充実，等が具体的に検討された内容として報告されている。

構造の混乱する項目を是正することは，9版に強く求められているところである。結果，インデクションによって階層関係を正確に表そうとしたり，注記の充実を図っている。DDCの「センタード・エントリー」の採用も考慮されているようであるが，事例は見受けられない。これらの措置は，分類作業上で求められる適用順位の明確化と直結するものではないが，改善点ではあろう。

しかし，示されている概要からは，構造上の明確化を強く志向している題目と，そうでないものとに分かれ，均衡を逸しているように見受けられる。こうしたことは，「分類実績が40件以上の項目を細分する」という基準にも見ることが出来る。この基準は，一方で“分割する”ための指針とし，他方ではこれら実績を盾に“分割は困難”とする判断として，時に使い分けられており，一貫性を欠く取扱となっている。基準となる分類実績は，NDLの分類コードにもとづくものであることにも留意する必要がある。

個別の項目に関しては，質疑の中で以下の点などが指摘・討議された。

- 1) 形式区分の使用法について（優先順位，重複使用可否の明示）
- 2) 地理区分について（歴史の下ではなく，地理の下で展開する。地理記号表の補助表への分離。適用範囲の明示など）
- 3) 建築や芸術の分野で，地理による区分か様式によるものか明確でない。
- 4) 相関索引の充実（BSH，NDLSH 件名の取り

込み)

オンラインによる目録検索が進展する中では、分類表の機械可読形式への変換が不可欠となる。すでに完成している NDC・MRDF8 の作成過程において NDC の問題点が浮き彫りにされてことを、今回の改訂でも生かしていただきたい。今後、オンライン・システム上での分類(表)の果たす役割や、その効果的な利用法については追求すべき課題として残されているが、そうした状況においては、表構造の明確さ、区分の論理性、索引語を含む階層表現力などが、よりいっそう厳しく求められることだろう。

### 1992年5月例会

日時：5月23日(土)14時～17時

会場：大阪市立天王寺図書館

テーマ：『三層構造モデル理論成立の過程を検証する』

発表者：岩下康夫氏(純心女子短期大学)

出席者：21名

谷口祥一氏(図書館情報大)が「記述目録法のための三層構造モデル理論」(『図書館学会年報』36(4), 1990.12)の中で提唱した、いわゆる「三層モデル理論」の問題点を、特に、当モデルの成立根拠に的を絞り検証を試みる。この際、発表者は谷口氏が当モデルを設定するに当たって示唆を受けたとする Patrick Wilson にできるだけ典拠を求めている。

以下、その問題点と発表者のコメントを付す。

1. 「著作単位」が“著者記入”の意で用いられている

「著作単位」という用語を用いているが、実際は「著作記入」を指していることが読み取れる。著作そのものを記述の対象とする著作記入の方法は、記述の対象となるべき資料を著作の単位で把握しようとする著作単位の方法とは全く別のものである。したがって、従来の用語法との調整が求められるのではないだろうか。

2. タイトルが著作の成立要件として求められていない

著作成立の要件にタイトルの存在を求めている。これは「一般的著作」に対して言及できるものであり、必ずしも「目録法上の著作」という文脈でもう一度「著作」を捉えなおす必要がある。この際、Wilson や Domanovsky の指摘する「目録法上の著作」は特殊で、一般的な著作概念との間に大きな隔りがあるという事実を無視することはできないだろう。

3. テキストと著作を各々異なったものと理解している

「テキスト(=文字列)」が表明している叙述内容を指して「著作」とする。さらに「著作」とは“テキストから知的内容的なまとまりとして抽出される抽象的な存在物”という。したがって、基本的に「著作」と「テキスト」は別のものであるとして理解している。一方 Wilson に三層構造のプロトタイプを見取ることができると論理を組み立てている。この論理を Wilson と比較・対照して検討した。

4. Wilson の「三段階モデル」と谷口氏の「三層構造モデル」は、提案の背景に違いがある

Wilson の提案した「三段階モデル」は、同一著作の諸版を統合的に解釈するという文脈においてであり、これは記述対象を構造的に把握し表現するという「三層構造モデル」提出の次元とは異なっている。また「テキスト」と「著作」を同一視することによって同一著作の諸版が統合的に解釈できることなどを指摘した。

谷口氏の提示する「三層構造モデル」理論は、上記のような問題点が存するものの、彼の主張の眼目であるテキストを中心に据えた記述の推奨については大いに評価するところであり、今後の理論展開を見守りたいと発表を締めくくった。

参考文献

谷口祥一 “記述目録法のための三層構造モデ

ル”『図書館学会年報』36(4)：149-166, 1990.12  
 パトリック・ウィルソン；高鷲・岩下訳 “目録の第2番目の目的”『整理技術研究』29：41-52, 1991.12

Patrick Wilson "Interpreting the second objective of the catalog" *Library Quarterly* 59(4)：339-353, 1989.10

### 1992年6月例会

日時：6月27日(土)14時～17時

会場：大阪府立中之島図書館

テーマ：『NDC 9版を考える - JLA分類委員会誌上報告を中心に - (各論)』

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

出席者：18名

日本図書館協会分類委員会が発表したNDC 9版の改訂試案の概要に対し、図書館学教育と実務者の立場から疑問点を豊富な実例を挙げて指摘した。

8版教育の経験から問題ありとする点(一例)

「図書館年鑑」「経済白書」のように場所と形式の二つの要素が重なる場合、図書館(経済) - 日本 - 年鑑とするのか、図書館(経済) - 年鑑 - 日本とするのか。「入門法学全集」は321.08とするのか320.8か。「基礎経済学全集」は331.08か330.8か。「現代社会学大系」は361.08か360.8か。「新アジア学」などの地域一般研究はどうするのか。NDCにはっきりとした指針がない。

最低限健全な論理を満たして欲しいとする点。

例えば、補助表における共通細目と特殊細目の関係、地理区分の位置づけ、「29 地理」における09のように形式区分を変更するときの扱い、工学における「09」の適用の問題、地理区分におけるやみ短縮の問題、インデクションの明確化とCentered entryの採用、等である。

奥行きのある問題として。

「～一般」を収める場所(Unique definition)

を決めて欲しい。共通細目を充実させる。分類表の使命は何か(書架分類か、冊子体目録における体系的配列用か、オンライン検索性用までも含むのか)。

現在の9版案はどうか。

40件を目安として細分をはかるとする分類委員会の方針は、例えば548.21～548.237のように種類で分けるという方法でなら正しいが、単に文献量が多いから論理も構造も無視して分けるということでは困る。しかし表全体としては、7 8版のときのような無意味なのに大きく変更した(例えば短縮形の多用)ということがないだけに、少なくとも改悪にはなっていないと評価している。

相関索引について

相関索引を言葉の真の意味での「相関」索引にするべきであり、そのためには本表中のことばを拾うだけでなく、他のツールからも下位語、同義語を採録してくる必要がある。ただし同じ階層の中では大概念で代表させることがありうる。異なる主題領域、異なる階層のときには、必ず掲載しなければならないし、倒置(＝上位語)や同意語への置き換えをして意識的に集中させ、ある概念は「索引になれば分類表には採用されていない」というような相関索引を作るべきである。基本的には、NDCのような分類表における原理(主題領域優先)に対し、逆の原理すなわち事象中心の原理で補うものである。「写真」を例にとると、8版の相関索引に収録されている以外に、014.76 マイクロ写真, 014.78 写真, 070.17 報道写真, 147.5 心霊写真, [336.743 広告写真], 442.7 天体写真, 444.8 太陽の写真, 446.8 月の写真, 454.9 地形写真, 498.92 写真(法医学), 535.85 写真機, 674.3(広告)写真, 740/748 における写真のつくことば、というようなことばの採録が必要である。

### 1992年7月例会

日 時：7月25日(土)14時～17時

会 場：豊中市立岡町図書館

テーマ：NDC9版検討会の報告

発表者：田村俊明氏(大阪市立大学附属図書館)

出席者：15名

田村氏は、前日日本図書館協会にて行われた分類委員会によるNDC9版検討会に出席したが、その報告である。

### 1. 改訂案の説明

まず石山委員長から総説の説明があった。改訂の基本方針として以下の3点がある。(1)NDC9版は、書架分類対応から書誌分類対応へ、さらに全国書誌の分類に対応できるようにすること。(2)分類表の項目は、国立国会図書館の分類実績をもとに40冊以上あれば細目化を検討した。(3)分類表の論理構造は、基本的には改変しないこと。そして、名辞の変更、補助表についての説明、見出しについての説明等があった。

次に各論として、各類について、担当委員から変更点等の説明があった。

0,1類：千賀委員 2類：平野委員 3類：岩淵委員 4類：岡谷委員 5類：相原委員 6類：検討中 7類：石川委員 8,9類：古川委員

### 2. 代表質疑・提言

整理技術研究グループ	吉田氏
私立大学図書館協会分類分科会	小林氏
整理技術研究研究会	松林氏
索引法研究グループ	北氏

以上4つのグループから、NDCを国際的観点から見直す必要があること、NDCの維持管理体制と改訂情報の双方向化の必要性、論理的矛盾の解決、機械可読方式であるNDC8版(MRDF8)の構造上の問題点、関連索引用語への言及等、多数の提言がなされた。

### 3. 代表質疑・提言および参加者アンケートに対する回答・コメント

月例会参加者からは、検討会会場からのアンケート内容についての質問や、分類表の伝記に

は問題がある、との指摘などが行われた。また、当グループの代表として代表質疑・提言を行った吉田氏からは、まず検討会自体の準備に不足があったのではないかと、8,9類改訂の充実がある一方、3類についてはまだ検討の余地があるなど、各類によって改訂作業に非常にばらつきがある、という指摘があった。現在ほとんどの図書館は、NDC8版あるいは7版を使用しているため、9版の改訂の内容は業務との関わりの中で深い関心を持つものである。さらにNDC9版の検討が深められることを望む声が強かった。

研究会終了後、伊藤館長の案内により、改装された岡町図書館の施設を見学した。

### 1992年9月例会

日 時：9月26日(土)14時～17時

会 場：大阪市立北市民教養ルーム

テーマ：NDC9版を検討する：2類(歴史)を中心に

発表者：蔭山久子氏(帝塚山短期大学図書館)

三浦 整氏(大阪女子大図書館)

出席者：15名

日本十進分類法の改訂作業も、ようやく大詰めを迎えてきた。9版改訂に対するアウトラインの検討は前2回の月例研究会ですませた。今回からは類目ごとの検討にはいる。今回の発表には、検討材料としてJLA分類委員会が『図書館雑誌』に公表してきた「試案の概要」とともに、本年7月に開催された説明会で示された「試案」も含めている。

#### 1. 2類：歴史(蔭山久子氏)

2類の改訂案では、改訂方針の一つである「分類項目40件以上の項目の細分」によって、分類表の構造を無視、ないしは壊しているところに問題があるとし、次の4点を指摘した。

(1)時代による細分：時代区分(01/07)はどの国にも適用可能かどうか。可能と解釈できる文章

が序説の中に記されていたり明確でない。実務上は各館いろいろな対応をしているようである。分類表に明示すべきである。

(2)地域による細分：特に考古学（日本）の扱いに問題がある。注記に記されている「必要に応じて日本地方区分する」は、歴史における区分特性である 地理区分 - 時代区分 の後に再度 地理区分 を置くことになり分類表の構造上不都合である。

(3)主題史の扱い：日本史の通史に置かれている主題史には「各時代・各地域のものは210.2/219.9に収める」としている。これらは、それぞれ助記性を持ったものとして記号展開させるのか、単に分散させるということなのか明確でない。試案でも詳細は不明だが、朝鮮史・中国史の通史にも同様の主題史が列記されているが、これらとの扱いとの関係についてもよく分からない。

(4)戦争のものと細分：「戦争のもと」とは何かという疑問がある。「通史・戦記」が置かれているが、時代区分の1項目として妥当だろうか。

## 2. 7類：芸術（三浦整氏）

7類は従来から9区分の限界から、主題概念レベルと記号桁数に差異がある。これらは未解決のまま9版に引き継がれていると指摘した。ここでは分析表を用いて、芸術・美術の下位綱目（71/77）の記号展開（要目レベル）について、「歴史」「伝記」「材料・技法」等の配置を検証し、列挙の一貫性を欠いていることなど、構面からの整合性を中心に問題点を説明した。あわせて以下の問題点も指摘した。

(1)芸術における時代区分、(2)芸術家の伝記、(3)芸術における相関係の扱い（新設）、(4)美術/工芸にみる問題点、(5)音楽・演劇にみる問題点

討論では、個々の問題点について参加者の解釈や、業務体験からの意見がのべられた。特に分類表の論理構造に関しては、使いやすさの面から重視すべきであるが、9版改訂案では、便宜的な展開などが目立つ旨の発言が多くあった。

なお、本発表は論文として『図書館界』44巻4,5号に掲載されている。

## 1992年10月例会

日時：10月31日（土）14時～17時

会場：大阪市立北市民教養ルーム

テーマ：NDC9版を検討する：4類（自然科学）を中心に

発表者：田村俊明氏（大阪市立大学附属図書館）

谷本達哉氏（夙川学院短期大学教務課）

出席者：10名

先月に引き続きNDC9版案の類別検討として、4類（自然科学）を対象とする。検討資料は前回と同様「試案の概要」と「試案」を用い、次の2つの観点から報告された。

1. 8版から9版への改訂項目にみられる問題点について（田村俊明氏）

(1)日本科学史の下の細区分（402.1）について  
時代区分として展開されたのは評価するが、江戸時代以前も含めて一貫したものとすべきである。

(2)新設項目：自然誌の扱い（402.9）について  
462の博物誌との区別が不明確。特にこの名辞を新設する必要性は疑問である。

(3)科学技術政策・行政（409）  
509.1との区別のための注記が必要である。

(4)同位元素の扱い変更：429.4 539.6  
新設項目：遺伝子工学の扱い 4類  
（467.25）

バイオテクノロジー 5類  
（579.9）

(3)と同様、4類と5類の区別が不明確である。

(5)凝結現象(451.6)の下の新設項目：降雪誌と降水誌

降水一般、降雪誌、降水誌、降雪量、降水量間の区分の対応関係が不明確である。

(6)河川学(452.94)と河川誌(517.2)  
海洋学(452)の下で、河川誌だけが 517.2 と

5 類にいくのは問題である。また，雪氷学 雪氷と変更になった理由はなにか。

(7)精神医学の扱い変更：493.7 493.709 の問題

2 . NDC が，8 版以前から引き継いでもつ問題点について（谷本達哉氏）

(1)生物学の下の「採集」の分類記号の相違

460.78, 470.73, 480.73

同様に「実験法」：-07, -072 および形式区分：-075

(2)医学(490)における体の器官等の流用問題

491.22/.28 および 492.432/.438 は，宗教のように，分類表中に別表を用意し，合成方法を明記すべきである。

### 1992年11月例会

日 時：11月28日(土)14時~17時

会 場：大阪市立北市民教養ルーム

テーマ：NDC 9版を検討する：その5-オンライン時代のNDC

発表者：吉田暁史氏（帝塚山学院大学）

タイトルとはやや異なり，オンライン時代の分類利用に関する外国文献の紹介を中心とする内容であった。

1 . オンライン目録による分類検索の要件は次の通り。

(1)ブラウジング機能（分類表の体系性を利用）

(2)検索の幅を広げたり狭めたり調整がしやすい。ただしこの機能は，Svenonius がパースペクティブ分類(perspective classification)と呼ぶような，文脈的な広がりを調整できるということである。すなわち知識ベースの体系にしたがって広げたり，狭めたりできるということである。

(3)分類検索を始めるにあたって，本表中や関連索引中の名辞によって，ことばから記号を探し出せるような機能が絶対に必要である。

(4)件名標目による検索へとスムーズに移行でき

ること。

件名標目による特定事象の検索との連携がうまくはかられること。

2 . Svenonius の論考<sup>1)</sup>

分類表には，taxonomic classification と perspective classification がある。前者は自然現象などのように，概念の階層がはっきりしている部分である。後者はそのような単純な階層にはならないところである。perspective classification は，概念を文脈によって関係づける。オンライン目録では，体系性にしがってブラウジングしたり，perspective classification を利用して検索を広げたり狭めたり出来るところに，分類の利用価値がある。このような利用を考えると，オンライン目録に適した分類表はむしろ列挙型分類表の方である。

3 . DORS (DDC online retrieval system)の紹介。

Svenonius の理論的考察を，UCLA で実験的に試したシステムである<sup>2)</sup>。DDC 分類の7類(芸術)を実験分野とし，この分野の分類表をシステムに組み込んで実験した。当システムの最大の特徴は，連鎖索引法によって本表中の分類記号に対する索引が作られていることである。これはコンピュータによって自動生成され，名辞としては，本表中および関連索引の用語が用いられている。分類による検索には，まずことばから入るが，このとき連鎖索引の左側すなわち，もっとも文脈の狭い語からの検索と，右側すなわち文脈の広い語からの検索との2通りが用意されている。前者によれば特定の語によって検索でき，そのことばの属する種々の観点(分散関連事項)が集中的に集められ，その中から適当な観点のものを選ぶことになる。後者によれば，ある特定の文脈の組み合わせが一覧されることになり，そこから特定の概念の組み合わせを選択する。

またこのシステムでは，分類記号と件名標目

との間にスムーズな移行ができるようになって  
いる。

4. 新しい分類用 US MARC フォーマット<sup>3)</sup>の  
紹介。

個々の分類記号すべてに階層関係を順になぞ  
った名辞がついているなど、興味深いフォー  
マットになっている。

発表後の質疑の中で、DORS に関して、これ  
はプロ級でなければ使えないだろうという指摘  
があった。

参考文献

1) Svenonius, Elaine. Use of classification in  
online retrieval. Library Resources &  
Technical Services. 27(1) 1983, p.76-93.

2) Liu, Songquiao and Svenonius, Elaine.  
DORS : DDC online retrieval system.  
Library Resources & Technical Services. 35(4)  
1991, p.359-375.

3) Guenther, Rebecca S. The development  
and implementation of the USMARC format  
for classification data. Information  
Technology and Libraries. 11(2) 1992,  
p.120-131.

### 1992年12月例会

日 時：12月19日(土)14時~17時

会 場：尼崎市立北図書館

テーマ：整理技術と森耕一氏 - 整理技術研究グ  
ループの活動から -

発表者：小野泰昭氏(元大阪教育大学図書館)  
志保田務氏(桃山学院大学)

出席者：18名

1992年11月5日逝去した森耕一氏の整理技  
術関係の業績を、整理技術研究グループ(整研)  
の1969年から1974年の世話人・小野泰昭と志  
保田務の発表を軸に偲んだ。

森は1951年鹿児島県立医大予科物理学教授  
から和歌山県立理科短大(のち医大進学課程)

に講師で移り、ここで図書館を兼務。日図研に  
入会し、程なく図書館研究界の中心となり、1955  
年10月「目録排列法研究グループ」を結成、『基  
本件名標目表』(JLA 1956)、『目録編成規則』  
(日図研 1961)の作成に参画した。この間1955  
年『分類作業：NDCのつかい方を中心に』(図  
書館界シリーズ;2 びぶりおそさいえて)を著  
した。

上記グループの後身が整研で、1957年8月、  
森、藤田善一の発起で発足した。小野までの世  
話人は天満隆之輔、前畑典弘、拝田顕(真紹)、  
上田格、藤沢徳男である。整研ではICCPを軸  
に研究を主導した。前畑の「国際目録原則の研  
究」(図書館界 19(6):233-237, 1968.3)はその系  
脈にある。1964年 森は同天王寺図書館長就任。

「中小レポート」(1963)、日野市立図書館の創設  
(1965)と館界中興のときだった。目録界も重厚さ  
からの解放を求めた。森は1964年、69年の二  
度『整理技術テキスト』(JLA)に簡易目録法を  
執筆した。

整研ではNCR1965年版の批判、昭和期の目  
録思想の研究などが続いた。小野「目録思想史：  
目録機能論の時代」(図書館界 21(5):163-168,  
1970.1)はその一所産だが、集大成は記述独立  
方式を規則化した「図書館目録規則案」(図書館  
界 26(4):109-117, 1974.12)である。石塚栄二、  
天満、埜上衛、森らの指導で浅野十糸子、岡崎  
すばる、小野、光斎重治、坂田摩耶子、志保田、  
武内隆恭、西田道子、拝田、藤井千年、藤沢、  
前畑、湊邦子、山下信などが策定し、NCR新版  
予備版に先駆けた。

森は天王寺図書館が主担のBMをめぐる議論  
に傾注。さらに中央館長となる1971年以降は政  
策論、自由論などに進み、目録分類研究から離  
れた。だが、整理分野への自信は終生四圍を圧  
倒した。

### 1993年1月例会

日 時：1月23日(土)14時～17時  
 会 場：桃山学院大学社会教育センター  
 テーマ：NDC 9版(案)の検討 - まとめ -  
 発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)  
 出席者：12名

## 0. 序

整理技術研究グループは、毎年、その年度のメインテーマを決め、それを柱として月例研究会の運営を行い、そして、それに基づいて日本図書館研究会研究大会の発表を行っている。今年度のメインテーマはNDCの検討である。これは来年度のNDC改訂を見据えてのものである。今回の研究発表は、今年度の研究活動の総決算といえるもので、日本図書館研究会第34回研究大会発表のたたき台となるものである。

## 1. NDC 検討の論点

吉田氏がNDCを検討するにあたって設定した論点(問題点)は、次の10点である。すなわち、1)初歩的論理性に関する諸問題、2)構造の問題、3)展開の問題、4)関係の問題、5)分類注記の問題、6)関連索引の問題、7)抜本的改訂の問題、8)維持組織の問題、9)機械可読版の問題、10)オンライン環境におけるNDCの問題、である。非常に広範に、さまざまな角度からNDCをめぐる諸問題を扱っている。

NDCの今回の改訂は、抜本的な改訂ではなく、NDC 8版の基本は維持しつつも、そのほころびを修正するという方針に基づくものである。その意味からは、1)の論点が改訂を見据えての発表としては重要である。また、時代環境を考えると、10)の論点も見過ごすことができない。それゆえ、吉田氏の発表は、1)と10)の論点に中心をおくものとなった。

## 2. 初歩的論理性に関する諸問題

ここでの氏の取り上げる諸問題は、NDCの明らかな矛盾点であり、今回の改訂のように抜本的な改訂でなくても、ぜひとも改訂されるべき点である。

第一に氏が触れるのは、助記表の問題についてである。初歩的論理性に関する諸問題の中で、一番多くの問題点が指摘される。まず、これは本来、補助表と呼ばれるべきことが強調される。そして、1)共通細目と特殊細目の区別、2)地理区分は形式区分の-02の展開にすぎないこと、3)地理記号表と言語記号表の独立などが主張される。次に短縮の問題が取り上げられる。形式区分の変更という、すぐに論理構造が破壊されるという議論がなされがちだが、これは短絡的な議論であるとして退けられる。短絡が問題となるのは、配列の一貫性が崩れるからであり、この点から短縮の諸問題が議論されるべきだとする。また、いわゆる“ヤミ短縮”を巡る諸問題にも触れ、短縮に対する方針を明確にすべきことが述べられる。その他、補助表関係では「-02」が「歴史」のみに限定されている項目があること、「歴史」における「-00-」の問題、形式区分が重複する場合の処理問題、日本時代区分の取扱の問題、形式区分変更点の明示の必要性、言語区分の曖昧性排除、補助表の充実・追加(人、民族、場所等)が説かれる。

第二に記号が階層関係を反映しない場合の処理問題について述べられる。十進記号法を採用するNDCでは、記号法が正確に階層を反映できるとはかぎらない。それゆえ、何らかの方策を講ずる必要がある。しかしNDCでは、このための方策が講ぜられていない。このための方策としては、1)正確な項目見出しの付与、2)センタード・エントリーの採用、3)インデクションの採用などが考えられ、改訂にあたっては、これらの方策を講ずべきであるとする。

第三に総記クラスの問題が取り上げられる。ここでは、形式クラスと主題クラスの混在が見られることが指摘される。

## 3. オンライン環境におけるNDCの問題

OPACの進展にともない、これを利用した主題検索が一般化してくるものと思われる。氏



は、1985年から1992年に発表された主題検索に関する諸文献を、この観点からレビューし、その結論として、安易で機械的な索引語の付与は、戒められるべきであり、これからの索引諸言語には、ますます理論的な基礎が求められるとする。したがって、オンライン検索を考慮するなら、NDCにも明確な論理的基盤が必要であり、これに基づいた一貫性のある構造が設定されなければブラウジング機能に支障をきたし、オンライン環境下では分類表として機能しなくなるのではないかと述べる。またオンライン環境では、言葉からの検索の重要度が増すという観点から、NDCと言葉との間にどのような関係をもたすか、またそれとの関係で関連索引をどのように構成するかということについても、研究が進められねばならないとする。

#### 4. その他の諸問題について

氏の取り上げたその他の論点(問題点)については、以下簡単にまとめる。構造の問題や展開の問題については、ファセット的考え方の必要性、配置順や区分原理適用順の明示や一貫性の維持、展開の根拠の量から質への転換などが主張される。相関係については、このような関係を吟味することの必要性が説かれる。分類注記については、注記形式を整備し分類規定に関する公式マニュアルを準備することが説かれる。関連索引については、語源の問題、同義語・下位語の収録問題や作成手順アルゴリズムの明確化および関連索引の連鎖索引化の検討について触れられる。抜本的改訂問題については、表面的な改訂で修正不可能な箇所は抜本的に改訂されるべきであり、これはDDCではフェニックスという名のもとに実行されている旨が述べられる。維持組織の問題については、これは明確に確立されねばならないとする。機械可読版の問題については、現在オンライン化が進んでおり、これが重要な位置を占めるので、これに必要とされる諸機能を考慮して、どのような仕様にす

るかという検討がなされねばならないとする。

#### 5. 質疑応答

北克一氏(摂南大学図書館)から、次の発言があった。1)区分原理適用の一貫性が守られていない例として考古学を挙げているが、ルポルタージュの例も取り上げてはどうか。2)伝記における「個人」の概念は2名までのはずであるのに、9版案によると、9類では「個人」は1名となっており、他の箇所と矛盾をきたしている。3)序説とか関連索引に関する方針が先ず明確化されるべきであるのに、それがなされていない。北氏の第3点に関連して野口恒雄氏(佛教大学図書館)から、7版から8版への改訂の際には、序説はほとんど改訂されていない旨が述べられた。

#### 1993年3月例会

日時: 3月27日(土) 14:30~16:30

会場: 相愛学園本部(本町学舎)

テーマ: 電子図書館

発表者: 原田 勝氏(京都大学教育学部)

出席者: 18名

発表者の原田氏は関西文化学術研究都市の研究プロジェクトとの関係から電子図書館研究会を運営している。昨年12月に、この研究会はテクニカルレポートを作成しており、今回の発表はこのレポートに基づくものである。

氏は、まず電子図書館実現のためには、二次情報(資料)のみを電子化するのではなく、一次情報(資料)の電子化が図られなければならないと主張する。しかしながら、これには著作権等超えなければならない壁が多く、電子図書館研究会は、まず目次情報の電子化を模索しているという。

電子図書館では、情報検索機能のみならず、すべての図書館機能(サービス)が電子化(コンピュータ化)されなければならないとする。例えば、レファレンス・サービスはAI技術で電

子化できる可能性がある。しかしながら、このような今あるサービスを単に電子化するというのではなく、電子化という新たな環境に即した図書館業務系のあり方自体が問われなくてはならないとする。

氏は、ついで、これからのメディアのありよう、出版のありように言及する。というのは、この点を見通さねば、電子図書館のグランドデザインが描けないからである。

図書館のメディアは、何百年も基本的には同様のもの（“ブック”形式）であったが、今後はメディアは多様化・マルチ化する。そして、今まではメディアは、その情報部分（メッセージ）と物理部分（キャリアー）の結びつきが強かったが、今後は両者の結びつきが弱まり流動化してくるとする。また、電子メディアが一般化してくるとメディアと情報生産者はダイレクトに結びつき、出版者という仲介役は現在の形態のままでは存在しえないのではないかと述べる。

情報検索については、従来型のキーワードマッチングではなく、“知的”な検索方式が求められるとする。そのためにシソーラスの形式も、これに堪えるものになる必要がある。情報化社会は国際化社会でもある。それゆえ電子図書館では外国人利用者や外国図書館とのネットワークを意識して、自動翻訳システムを図書館システムに組み込むべきだとする。

最後に氏は、まもなく CD-ROM 一枚に、テキストデータなら 3 万冊程度の分量が入る時代が到来し、高速のワークステーションが手軽に利用できる時代がくることを強調して発表を終えた。

発表の後の質疑では、芝勝徳氏（神戸市立中央図書館）が、電子メディアの交換フォーマットの問題、電子環境における検索ツールの問題をただした。志保田務氏（桃山学院大学）は、資料の電子化は目次情報から着手するというが、なぜ抄録からではないのかという疑問が提出さ

れた。これに対して、原田氏は抄録といえども著作権の問題が絡む旨を返答した。吉田暁史氏（帝塚山学院大学）からは、1)「二次情報サービス機関はこれからは難しくなる」という発言について、2)情報検索用のシソーラスと文書理解用等のシソーラスとは同様なものになるのかどうかという 2 点が質問された。1)については、一次情報を保有していない二次情報のみの機関は苦しくなるという意味、2)については、かなり結びつくと思われるが、同じと言い切る材料もないという回答があった。前川和子氏（大谷女子大学図書館）は、来年度の電子図書館研究会の活動と、図書館の増築的な規模拡大の発想について質問した。前者に対しては、もうテクニカルレポートの発表ではなく、実際に実験システムを構築する予定、後者に対しては、少なくとも従来とは違う発想（例えば、本にして 3 万冊分になるという事態に対応できる発想）が必要であるとの回答がされた。

### 1993年4月例会

日時：4月24日（土）14時～17時

会場：相愛学園本部（本町学舎）

テーマ：整理技術研究史と整理技術研究グループ

その3：記述独立方式目録規則の策定へ

発表者：志保田務氏（桃山学院大学文学部）

出席者：18名

1991年5月と11月に引き続き本テーマの第3回目、今回は「記述独立方式目録規則策定」をメインテーマとし、期間としては前回と重複する部分もあるが、1970-1977年を対象とする。

NCR1965年版は基本記入方式を採用したが、その刊行の時期と前後して、すでに記述独立方式によるカード事例が森耕一によって「整理技術テキスト」（日本図書館協会）に記されている。そこでは、基本記入標目の省略に加えて出版地・大きさの省略という形が採られており、「中

小レポート」以降の目録の簡略化の流れを受け継いでいるものと考えられる。整理技術研究グループは、NCR1965年版の批判とともに、ICCPや昭和期の目録思想の研究、記述独立方式と基本記入方式の比較検討等の活動をこの時期行っている。

その後「整理技術通信 No.13」(1970年5月)では、「標目未記載記述ユニットカードの検討について」が報告され、また同年6月に開催された第1回整理技術全国会議では、「日本目録規則新版予備版(案)」が提案され、多くの支持する発言が会議を支配した。この会議に出席した石塚栄二は、その報告を例会で行っており、その後の研究例会では、記述独立方式による目録が中心的なテーマとして取り上げられるようになる。これらの活動を反映して、1971年から1976年に至る6回の日図研研究大会では、整理技術研究グループは記述独立方式による目録およびそのもとにおける標目・図書記号をテーマとして発表を行っている。

日本目録規則新版予備版は1977年12月に刊行されたが、刊行に至るまでの期間、整理技術研究グループが目録委員会に与えた影響は少なからずあったものと推察される。森耕一による記述独立方式による目録規則が策定されたことは、活動の一つの成果として位置づけられるものであろう。

### 1993年5月例会

日 時：5月22日(土)14:30~17時

会 場：相愛学園本部(本町学舎)

テーマ：整理技術史と整理技術研究グループ

その4：NCR新版予備版批判の展開

発表者：志保田務氏(桃山学院大学文学部)

出席者：14名

1977年を起点とする考察である。この年12月『日本目録規則新版予備版』(以下NCR77)が発行された。整研はNCR77が依拠する「記述

ユニットカード方式」を、自らが主張した非基本記入方式を取り入れた規則と評価した。公刊前の11月「日本目録規則新版予備版(案)における用語及び用語解説について」を、『界』29巻4号に寄せ、この規則の完成に助力した。

翌1978年2月、日図研第19回研究大会で、「目録情報サービス発展のために：印刷カードを中心に」なるシンポジウムがあった。JLA理事長・高橋徳太郎を囲み、石塚栄二、志保田務、光斎重治等が参加論述した(『界』30(1), 1978.5)。そして6月、「国立国会図書館への要望書：国立国会図書館の目録サービスについて(要望)」を日図研森耕一理事長名で提出した。整研が内容作成の実質を担った(『界』30(2), 1978.7)。これに対し国立国会図書館は副館長・酒井悌名で「国立国会図書館の目録サービスについて(回答)」を送付、充実化を約束した(『界』30(4), 1978.11)。整研は少しのちに「我が国における印刷カード事業の史的考察 - 今日課題への文献レビュー的アプローチ」を『界』30(6), 1979.5で論じた。

ところでNCR77には完成度の低い部分がある。図書以外の記述の条項と、排列に関する条項である。そこで主題目録の排列について、1978、1979年の第19、20回研究大会で藤井千年、志保田務が論述した。

1978年は『日本十進分類法新訂8版』が出た年でもある。整研では1980年の第21回研究大会で野口恒雄、浅野十糸子が研究発表し、後の主題研究への基礎が築かれた。なお『NDC変換便覧』(8版対6,7版)を制作した。

1980年からNCR77の構造的欠陥への批判が開始される。LA研の「ISBDから見たNCR新版予備版の問題点」(田口瑛子)等である。整研も、NCR77の批判を再開した。「NCR新版予備版適用上の問題点」としてこの年度を駆け検話し、第22回研究大会で山野美贇子等が追究した。また逐次刊行物(吉田暁史)、目録利用調査(吉田憲一)等の検討もこの時期に積まれた。

1983年、丸山昭二郎 JLA 目録委員長のもと新目録規則の検討が始まる。整研は躍動場所をさらに探った。

### 1993年6月例会

日 時：7月3日(土) 14時～16:45

会 場：大阪市立天王寺図書館

テーマ：件名からみた複合主題と分類からみた複合主題

発表者：松井純子氏(大阪芸術大学)

出席者：10名

「宗教と科学」などのように複数の主題が相互に関連した複合主題の分類について NDC と NDLC それぞれの場合における問題点を、いくつかの実例をもとに考察した。

NDC や NDLC のような列挙型分類表では、複合主題に対応するための方策として、(1)複合主題の項目をあらかじめ表中に列挙する、(2)分類コードにより、複数の主題から主な主題を1つ選ぶ、(3)各主題ごとに記号を当てはめ、それらを合成する、の3通りがある。

(1)について、NDC では「316.2 国家と宗教」「374.6 家庭と学校との関係」「490.15 医学と倫理」「519.13 公害と社会」「699.8 放送と社会」などきわめて少数しかなく、NDLC でも「FA51 教育と社会」「K32 芸術と他の主題との関係」「M57 (科学と)他の主題との関係」「SC47 医学と他の主題との関係」「UC41 ジャーナリズムと社会」など20余りの項目が設けられているにすぎない。

(2)については、選ばれなかった他の主題に対して分類重出が必要であるが、現状では重出されずに切り捨てられる傾向がある。

(3)について、NDC では形式区分 04 の注記に、「他主題との関連性及び特定の概念・テーマから取り扱われたもの(General special)も、ここに収めてよい」(NDC 8版 p.333)との記述があり、他の主題との関係を表現できることになっ

ている。しかし、本来内形式であるべきものが、外形式の 04 (論文集、雑著)と混在させられているという欠点がある。

最後に、J-BISC から抽出された実例を見ながら、件名と分類との比較を行った。例えば同じ「宗教と医学」という件名をもつ2つの資料があり、一方は医学に、他方は宗教に分類されて、それぞれ分類重出は行われていない。すなわち、件名は主題間の優先関係を反映せず、比較・対照の場合と同様に並列的に表現されていることになる。

### 1993年7月例会

日 時：7月17日(土) 14:10～16:50

会 場：豊中市立岡町図書館

テーマ：『日本目録規則 1987年版』の改訂動向と問題点

発表者：北 克一氏(大阪工大摂南大学)

出席者：13名

『図書館雑誌』86(11)、(12)に掲載された改訂案概要および、1992年10月17日及び12月19日付の改訂案をもとに、規則構成上の問題点を中心にして、問題点の指摘、解決方法の示唆などの報告が行われた。

1 .1987年版 1993年版への改訂における問題点

(1) 規則構成上の問題点

1) 完全版という名称の問題

2) 8, 10, 11章は第1次案のまま。章の完成をどうするか。

3) 12, 13章が繰り上がっている点。点字資料が11章に変わっている点。これらの必然性について。

(2) 条項個々での問題点

1) 「1.9 書誌階層」の大幅な改訂。条項の組み替えは、外形式の整合性を高めたが、集合書誌単位の階層性に対しては十分には視野に入っていない。

2) 複合媒体資料をめぐる混乱。セットとは何か。用語概念軸にくるいがみられる。

3) 上位 - 下位のレベルがある場合の記録の順序  
構成レベルの記録だけが、下位 上位となること。また構成単位の階層がある場合の区切り記号法は。

4) 記述の基盤と情報源、特に集合単位の場合  
・記述の基盤が明確でないための問題点：先に刊行されたもの、あるいは第1巻か。

・情報源は「その図書から」は問題。

5) タイトル関連情報が本タイトルのほか、並列タイトルにもある場合の記録順序の問題。

6) 物理単位の規定

・物理単位の定義 は問題がある。1.10.0「・・・集合単位」を分割した・・・単位」は、単行単位でもある。

・簡略多段階記述様式は、物理単位の記録ではなく、多段階記述様式の簡略方式であるはず。

7) 図書の記述の精粗：第3水準も例示して示すこと。

8) 標目

・MARC 関係の条項が削除されている。

・著者標目の選定基準で、87年版での別法が本則に変更された根拠は何か。

2. 改訂されない問題点

(1) 固有のタイトルの定義を明示せよ。

(2) 構成レベルの記録の記述要素が不十分である。

3. オンライン目録時代における目録規則のあり方等

オンライン目録の時代では、伝統的な標目概念とは異なるあり方が必要。ワード検索、漢字検索、ブール演算など時代の変化に対応した取り組みが行われていない。また、論文レベルでの検索ができるように、構成レベルでの記録を充実させるべきである。

発表の後、次のような質疑が行われた。

(1) 87年版を改訂する必要性は何か。なぜ「完

全版」と呼ぶ必要があるのか。

(2) 今回の改訂によりどのようなメリットがあるのか。

(3) 物理単位について

(4) 団体の附属機関の標目選定等について。

### 1993年9月例会

日 時：9月25日(土) 14:10~16:50

会 場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：『日本目録規則 1987年版』による書誌データベースの展開：書誌階層規定を軸として  
発表者：北 克一氏(大阪工大摂南大学)

出席者：16名

本発表の主旨は、書誌階層規定を軸とした書誌データベースの論理設計を行うことにより、その機軸の有効性の検証と問題点の指摘・解決の模索を進め、「日本目録規則」1993年改訂案に対する提言を探ることにある。

書誌データベースの論理構造を、非逐次刊行物と逐次刊行物とに二分したうえで論究が行われた。

#### 1. 非逐次刊行物

縦軸に単行書誌単位を中心に、上・下にN階の集合書誌単位と構成書誌単位を配し、横軸に記述、著者典拠、主題索引を見る。内、著者典拠、主題索引については、GARE ガイドラインやUNIMARC Authoritiesを引きながら典拠コントロールの領域とする。そして、この典拠が対象とする書誌的実体を、先の3つの書誌階層を縦軸として対峙させた。ここで次の3点が問題提起された。

(1) [出版] 物理単位特有の書誌的事項の展開方法

(2) 構成書誌単位の記述の基盤と目次等情報の位置づけ

(3) 付属資料等を例示として、物理単位[物的単位]特有の書誌的事項の展開方法とアクセスポイント化

さらに、記述対象資料のさまざまな多様性を「セット管理情報」- 2つの“belong to”の関係として、静的と動的（アプリオリ/アポストオリ）に区分し、「コンビネーション情報単位」という概念を展開した。この基盤の上に立って、書誌データベースの書誌の特性を「レイヤ」と「属性」に分化すべきとし、最もシンプルな枠組みで、最も複雑な構造の記述対象を収めることが正解ではないかと提示した。

## 2. 逐次刊行物

逐次刊行物については、その特有の書誌的事項である巻次・年次に関する事項の位置付けと、所蔵巻次・年次との書誌データベース上のリンク構造や、製本単位、巻次・年次との扱い、さらに構成書誌単位および目次情報の構造上の位置などが論理図式を用いて発表された。1

『日本目録規則』1993年改訂案に基づく書誌データベースの論理的検証から出発し、記述目録法と典拠管理の範囲を超えたかもしれないところまでの展開は、刺激にとんだものであった。

### 1993年10月例会

日 時：10月23日（土）14:10～16:50

会 場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：整理技術史と整理技術研究グループ

その4：新版予備版から1987年版へのかかわり

発表者：志保田務氏（桃山学院大学）

出席者：13名

グループ史研究の最終回であり、ほぼ1980年代を対象とする。この時期の研究活動の特徴を次のようにまとめる。

1) 新版予備版における主題目録の排列規則が不十分であるとの認識から、主題検索についての学習

2) 整理技術全国会議への関わりからNCR1987年版への関与

前回発表の中心であった新版予備版に対する批判展開はこの時期も続けるが、その中から分

類目録や、件名目録の排列に関心が向かった。そこで、山下栄による「分類目録の件名索引法」（『界』30(2),1978. 30(5),1979）の実証的検討を始める。この連鎖索引法検討から主題系の学習の必要性を痛感し、*Faceted Classification*, *PRECIS*, *BC2*, *Thesaurus Construction* 等、基本文献の講読を進めた（1983-1988）。これらの学習はNDCの体系検討からNDC 9版案批判に、また図書館学シソーラスの試作からBSHのシソーラス化などに結びつく。

整理技術全国会議はこの時期、第8回：非図書資料、第9回：NCR 本版化について、第10回：NCR 本版案、を中心議題として開催された。それぞれに代表を派遣し意見発表や提言を行った。NCR 本版策定にあたっては、当グループもこれを重要テーマと位置づけて対応した（1984-1990）。

NCR1987年版成立後、この規則に導入された新しい概念である書誌階層の普及にも貢献した。

なお、1984年『界』200号特集「わが国における図書館・図書館学の発展：昭和50年代を中心に」中の目録と分類関係2論文の作成過程に、グループが事実上関わった。

活動史を総括して、グループの活動の中心はやはり「目録」であったといえる。主題系の課題に対して、「分類」はNDC中心ではあるが、それなりに取り組んできた。しかし「件名」ではそれほどの実績がない。また、機械系についても同様に弱いとみる。しかし、グループを世代的に見渡し、創設期のメンバーを中心とする第1世代、図書館目録規則作成期のメンバーを中心とする第2世代、新版予備版以降に加わった第3世代、機械系に強い第4世代とするなら、弱点である分野へは今後、主題系への挑戦を始めた第3世代や、機械化を得意とする第4世代が活動を進展させてくれるだろう。

### 1993年11月例会

日 時：11月20日(土) 14:10～16:50

会 場：豊中市立岡町図書館

テーマ：韓国・梨花女子大学図書館とその目録システムについて

発表者：田窪直規氏(奈良国立博物館)

出席者：8名

文部省科学研究費補助金による「日韓両国に所在する韓国仏教美術の共同調査研究」で、1992年9月14日～24日の期間、韓国で情報管理システムの視察を行った際に訪れた梨花女子大学図書館、国立中央博物館附属図書館について、整理関係事情を中心にスライドを使って報告された。なお、内容を補強する意味で、花房征夫「韓国の図書館」(『図書館雑誌』79(1), 1985)等が報告の際に参考にされている。以下に簡単に内容を紹介する。

#### 1. 韓国の図書館事情

(1) 目録法：韓国目録規則(KCR)は、現在は第3版(1983)の誤字脱字等を中心に改訂した3.1版が使用されている。これに、標目篇と配列篇を加えた規則とするための委員会が1988年に発足している。

この第3版では、日本の場合のように、基本記入方式から記述ユニットカード方式に変わっており、区切り記号法としてISBD区切り記号法を採用している。

(2) 分類法：一般的には、公共図書館を中心に韓国十進分類法(KDC)が広く用いられている。KDCは、DDCあるいはNDCと類の構成が少し異なる。

0: 総記 1: 哲学 2: 宗教 3: 社会科学 4: 純粋科学 5: 技術科学 6: 芸術 7: 語学 8: 文学 9: 歴史・地理 の構成となっている。

(3) MARC:韓国文献自動化目録法(KOMARC)が作成されている。1992年8月現在、全国の71の図書館に約20万枚のカード提供を行っており、データ件数は45万レコードに及ぶ。現時点では、単行書と学位論文のみを対象としているが、古

書、非図書資料の規則が整備され始める時期のようである。フォーマットは、外形式がISO 2709準拠、内形式は、おおむねUS MARCに準拠する。AACR2の影響を受けているので、現場では基本記入制が重視され、基本記入フィールドを持っている。

(4) 図書館ネットワーク：「5大国家機関電算網計画」があって、1983年からは、その内の「図書館情報電算網」計画がスタートしている。1991年から5カ年計画で、国立中央図書館をセンターとし、19の地域センターと161の公共・大学図書館を接続する電算網の策定が目指されている。

(5) 大学図書館等で所蔵する外国関係資料の大半は日本語資料である。例えば国立中央図書館の所蔵する100万冊の半数以上は日本語資料である。したがって、図書館学校では日本語の修得が必修単位となっている。以前は日本語資料は日本語による整理を行っていたが、現在では、通常の利用者は日本語が分からないので、大学図書館における日本語資料の整理方法は、(1)日本語読み方式、(2)ハングル読み、(3)両者の混在、の3つのケースに分かれているようである。

(6) また図書館学校在籍学生の約8割は女性と、女性優位であるが、結婚退職を前提とする慣行があるようで、図書館には年輩の女性図書館員は少ないようである。

#### 2. 梨花女子大学図書館とその目録システム

(1) 梨花女子大学は韓国発の女子大学であり、韓国で3番目に古い名門大学である。11学部3大学院からなるが、情報学・図書館学の大学院コースを持っている。

(2) 図書館のスタッフは57名で、29名が専門職司書、26名が非専門職、2名がコンピュータ専門家であり、職場異動が激しいようである。

(3) この大学の図書館学科崔錫斗助教授によりELIS(業務管理)システムが開発されており、

そのコンセプトは“ Easy to Use ”である。OPACでは、蔵書 70 万冊中、約半分の 34 万冊が検索できるようになっており、メニュー式とコマンド式の二様の検索方式を備えている。

なお詳細は、「韓国梨花女子大学とその目録管理システム及び OPAC について」(『図書館界』44(6):310-313, 1992)を参照のこと。

### 3. 国立中央博物館附属図書館

図書役 2 万数千冊、雑誌百数十点を持つ小さな規模の図書館で、分類は KDC を使用している。職員は 2 名だけで、それも正職員かどうかは分からない。図書館は外部の人が自由に利用できるようになっており、平均 1 日 10 名程度の利用者がある。

### 1993年12月例会

本例会は「整理技術研究グループ 35 周年記念の集い」の第 1 部として開催された。

日 時：12月11日(土) 15時～20時

会 場：なにわ会館

出席者：58名

当グループは 1957 年(昭和 32 年)8月3日付けで故藤田善一氏、故森耕一氏を世話人として発足した。以来、日本の図書館整理技術の進展に寄与してきたと自負している。今回、35 周年記念の集いには、この歴史を担われてきたメンバーが一堂に会する機会であるとともに、これからの新しい時代に飛躍していく契機として設定された。

#### 第 1 部：記念講演と報告

記念講演：『目録編成規則』の成立前後 石塚栄二氏

報 告：資料から見た整研の活動史 志保田務氏

石塚氏の講演は、整研の成立母胎となった目録排列法研究グループの活動を通して整研の成立に至る経過について話された。志保田氏は、今回の集いに備え、5 回にわたり月例研究会で

発表してきた整研の足跡を、戦後の整理技術研究の動向にてらし、年を追った形式で報告した。この報告は記念冊子「日本図書館研究会・整理技術研究グループ史」としてまとめられ、当日の出席者に配布された。

#### 第 2 部：記念パーティ

京阪神だけでなく、東は東京、西は岡山から元メンバーや整研の活動に関心を向けていただいていた方々から 51 名が出席した。発起人を代表して天満隆之輔氏(日本図書館研究会理事長)は、1966 年 12 月には 10 周年記念の講演とシンポジウムが開催されたが、それ以降このような機会をもてなかった。今回 35 周年を一つの節目に、整研を囲んだ図書館関係者が一堂に会し旧交をはかるとともに、整研のさらなる発展と研究の深化を期待したいと開催の挨拶をした。

### 1994年1月例会

日 時：1月29日(土) 14:10～16:50

会 場：大谷学園帝塚山学舎

テーマ：目録法の蓄積と現代的課題 - N C R 92 改訂まで

発表者：志保田務氏(桃山学院大学文学部)

出席者：12名

日図研第 35 回研究大会においてグループ研究発表を行う研究テーマをまとめ、最終回としての検討を行った。

目録規則の戦後の歴史をふまえ、今日のコンピュータ目録をも含めた規則はどうあるべきかを、NCR1987 年版改訂の動向をも絡めて提起した。

目録法研究の歴史的な経過が簡単ではないかとの指摘があり、それを受けて発表稿ではその点を配慮する旨回答があった。

### 1994年3月例会

日 時：3月5日(土) 14:10～16:50

会 場：大阪市立弁天町市民学習センター



テーマ：パネルディスカッション『目録法と書誌情報』を巡って

パネラー：坂本 博氏（国立国会図書館）  
 和中幹雄氏（国立国会図書館）  
 山野美贇子氏（大阪府立大学総合情報センター）  
 志保田務氏（桃山学院大学）

出席者：21名

『目録法と書誌情報』の岩下康夫氏の書評(『図書館界』45(4):369-371, 1993)に対して、時を移さず和中幹雄氏の反論が次号(『図書館界』45(5):438-441, 1993)に掲載された。当研究会は執筆者グループの坂本博氏と和中幹雄氏を招いて問題提起の場を持つことにした。

1. まず志保田務氏が本書の成立経緯を時間的流れにおいてみると、情報化社会における図書館情報サービスの迅速性の要求が今日のコンピュータ目録の普及を促した一面があり、「NCR新版予備版」から「NCR1987年版」への改訂はそうした時代の変化を反映したものであろうと述べた。また、「第3回 TP&D フォーラム'93」で和中氏が「日本目録規則 1987年版の歴史的位 置」のテーマで目録法の主要な概念について論じたことを合わせて紹介し、本書に表れた目録思想には注目すべき点があると言及した。

2. 次に本書「第1部基礎編」の坂本博氏が、世界を広く巡り歩いて得られた目録法上の実例を具体的に解説した。坂本氏は、本書の「幻の11章」と称して「目録実務と目録法と専門職」(『整理技術研究』32:1-4, 1993)について触れ、氏が本書で著したかったことの結論であると紹介した。目録実務においては目録法の Why を知った上で、自館の目的に沿った目録をつくるのが真の専門家であると言及し、世界は広いと強調した。

3. 「第2部応用編」の和中幹雄氏は、『目録法 - その見方考え方』(国立国会図書館, 1989)が

氏の目録法についての立脚点であると述べた。書誌単位については NCR の定義は一つの考え 方ではあるが、データ要素ではない。データ要素の背後にあるものを考えたい、日本の目録規則は狭いと言及した。また本書(p.107)にも述べたとおり『日本全国書誌』の物理単位の分割記入は、“全国書誌作成機関である国立国会図書館が新版予備版を採用することによって完本記入を放棄した”ことよるとして批判した。

4. 山野氏は、書誌ユーティリティに参加する共同目録作業時代の目録法について第6章でもっと具体的に展開して欲しかったと、この点については和中氏と同意見であった。

書誌情報の共有という形態が広がり、電子媒体資料の出現によって書誌と目録を区別することが困難になる、あるいは区別する必要が減少していく傾向にあるとも考えられる。「所蔵」という概念自体も再検討する必要が生じるであろう。こういった点において目録法の基本原理に対する変化があるかもしれない。その意味で目録法と書誌情報の関係はまさに今日的な課題ともいえよう。

基礎編については、「基本記入の標目邪魔論」が「きわめて乱暴な議論である」とする箇所(p.88)については、基本記入に対する過度の思い入れがあるように見受けられる。基本記入が現在でも有用であるとすれば、電子媒体資料等における著作の諸版の集中機能という今日的意味合いで論じて欲しかった。

応用編では、使用される用語の種類、定義方法に問題があるのではなからうか。なぜ「書誌単位」と「書誌的単位」を使い分けるのか。「著作」「出版物」「図書館資料」の定義については岩下康夫氏が“著作単位”“書誌単位”と“書誌階層”：日本目録規則本版案批判試論(『図書館界』38(3):148-154, 1986)で厳密かつ明晰に論じているように、「著作」という用語は多様な意味を帯びている。慎重な取扱いが望まれる。

### 1994年4月例会

日 時：4月30日(土) 14:10～16:50  
 会 場：大阪市立弁天町市民学習センター  
 テーマ：電子図書館における目次情報  
 発表者：谷口敏夫氏(光華女子大学)

将来の電子図書館のデータ内容に関して、目次情報の重要性や意味付けを全文データと比較して論考した。

### 1994年5月例会

日 時：5月21日(土) 14:10～16:50  
 会 場：豊中市立岡町図書館  
 テーマ：刊行された『日本目録規則 1987年版改訂版』を手にして  
 発表者：志保田務氏(桃山学院大学文学部)

日本目録規則 1987年版は、準備中であった3章分を充足させると同時に、従来の規則構造をも少なからず変更させて、改訂版として刊行された。今回のNCR87改訂版について、具体的にページを繰りながら概観し、改訂内容について批評した。

### 1994年6月例会

日 時：6月25日(土) 14:10～16:40  
 会 場：大阪市立阿倍野市民学習センター  
 テーマ：NDC改訂作業の最終段階を迎えて：補助表を中心に  
 発表者：古川肇氏(中央大学図書館)

NDC9版の改訂作業は最終段階に入っている。あまり大きな変化のない9版ではあるが、補助表に関しては、地理記号表と言語記号表の独立という形式上の大きな改善がある。この補助表に関して改訂案の説明を行うと同時に、最新の改訂状況を概観した。

参考文献：JLA 分類委員会 日本十進分類法第9版試案の概要 その11『図書館雑誌』87(4),

1993.4.

### 1994年7月例会

日 時：8月6日(土) 14:10～16:40  
 会 場：大阪市立阿倍野市民学習センター  
 テーマ：『現代の図書館』特集“整理組織の現在”を読んで

司会：志保田務氏(桃山学院大学)  
 久しぶりに『現代の図書館』が整理技術に関する特集を組んだ。昨今では整理関係ツールの改訂動向が大きな話題となっており、それに応じたものと考えらる。この特集号に掲載されている論文について、執筆者を交えて紹介と参加者による批評を行った。

参考文献：『現代の図書館』32(2), 1994.7.

### 1994年9月例会

日 時：9月3日(土) 14:00～17:00  
 会 場：大阪市立弁天町市民学習センター  
 テーマ：整理ツールの新時代  
 発表者：志保田務氏(桃山学院大学)  
 内容は『図書館界』47(3) p.112-121, 1995.11を参照。本例会は、日本図書館研究会研究例会との合同研究会である。

### 1994年10月例会

日 時：10月29日(土) 14:10～16:40  
 会 場：大阪市立阿倍野市民学習センター  
 テーマ：UDCからNDCを見る  
 発表者：浜田行弘氏(関西学院大学図書館)

十進分類法のひとつであるUDC(国際十進分類法)は、図書の分類だけでなくドキュメンテーション等でも広く用いられている。UDCの概要と特徴を紹介し、ドキュメンテーションと情報検索における利用例を報告した。さらにUDCとの対比において、NDCの検討も若干行った。

### 1994年11月例会

日 時：11月26日(土) 14:10～16:50

会 場：大谷学園帝塚山学舎

テーマ：NDC 9 版刊行直前にあたって

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

NDC9 版も、いよいよ来春には刊行される。当研究グループはNDC改訂を機会として、主題検索に関わる諸問題について検討してきた。これらをまとめるにあたり再度9版刊行までのいきさつを振り返りながら、9版の問題点等について整理した。同時に、オンライン環境下での分類の意義についても考察した。

#### 1994年12月例会

日 時：12月17日(土) 14:10～16:50

会 場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：NDC 8 版を使用したOPACの主題検索支援システム構築の試み

発表者：渡邊隆弘氏(神戸大学附属図書館)

NDC 8 版を使用した OPAC の主題アクセス支援システムの実験的作成について報告した。とりわけ、検索支援ツールとしての諸機能実現に必要な分類表データベースの構造・内容についての論議があった。

参考文献：『図書館界』46(4), 1994.11, p.164-176

#### 1995年1月例会

日 時：1月21日(土) 14:10～16:50

会 場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：NDC 9 版とオンライン目録

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

・本例会は、震災の影響により中止となった。

#### 1995年3月例会

日 時：3月25日(土) 14:10～16:50

会 場：豊中市立岡町図書館

テーマ：情報検索への認知的アプローチ：文献紹介

発表者：斎藤泰則氏(鹿児島経済大学)

訳書『情報検索論』は、認知科学的手法を取り入れた情報検索研究への展開を概観したものである。認知科学は思考や言語という人間の認知的活動に関する理論および研究方法論の総体である。情報検索という行為も人間の認知的活動の一つである以上、利用者の認知的特性を踏まえた検索システムが必要となる。

参考文献：David Ellis 著；斎藤泰則，鈴木志元，村上泰子訳；細野公男監訳『情報検索論：認知的アプローチへの展望』丸善，1994

本書では、情報検索における利用者の認知的特性に関する研究を概観し、その特性を反映したシステムが紹介されている。

#### 1995年4月例会

日 時：4月22日(土) 14:10～16:40

会 場：大阪市立阿倍野市民学習センター

テーマ：BSH第4版機械可読版フォーマット(案)

発表者：北克一氏(大阪市立大学)

日本図書館協会件名標目委員会では、基本件名標目表第3版の改訂作業を進めてきたが、並行して昨今のOPACやネットワークの進展に対応すべく同標目表のMARCフォーマットの開発を進めてきた。このフォーマットは、典拠ファイルとしての頒布のみならず、ネットワーク上での差分データの自動交換をも考慮しようとしている。このフォーマット開発に携わっている同委員会の北氏による開発目的やフォーマットの解説等が行われた。

参考文献：『現代の図書館』32(5)

#### 1995年5月例会

日 時：6月3日(土) 14:10～16:50

会 場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：米国カリフォルニア図書館見学セミナー参加報告記

発表者：三浦整氏(大阪府立中之島図書館)

3月下旬の9日間、標記セミナーに参加した。5年前に参加した同種のツアーで訪れた図書館を含むものであるが、そこでは目録作成の技法を重視する時代から、多様なアクセスを保障するシステムへと大きく変化している実感を得た。その背景と実状を、カリフォルニア大学図書館、ロサンゼルス公共図書館を中心に報告した。

#### 1995年6月例会

日 時：6月24日(土) 14:10~16:50

会 場：大谷学園帝塚山学舎

テーマ：NDC 9版を考える - まとめ -

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

NDC 9版の刊行がいよいよ間近に迫ってきた。今日もはやオンライン検索という環境を抜きにして、分類を考えることはできないが、この前提のもとに NDC 9版に関する問題点を報告した。同時にオンラインにおける分類利用一般の問題についても論及があった。

#### 1995年7月例会

日 時：7月22日(土) 14:10~16:50

会 場：大阪市立天王寺図書館

テーマ：目録議論の現在：アメリカの目録事情と日本

発表者：志保田務氏(桃山学院大学文学部)

アメリカの目録研究者が本質的な目録議論を交わす機会は少ない。例えば非基本記入のNCRを紹介したところで、それは日本語を軸とする特殊事情という理解に終わることが多かった。AACR2の基本記入制の可否を闘わずようなこともほとんどない。MARC, LCSH, ISBDについて会話できれば幸運とでもいえよう。多くのディスカッションは、OCLC, Internet(Gopher, Mosaic)の効果的な利用など、E-Mail, データベース関係の議論に変化してしまう。目録と情報検索などの間の差が感じられなくなっている。そうした中で、AACR2の個人編者マイケル・ゴ

ーマン氏は日本の目録理論に興味を示し、MARCフォーマットの改訂を考えている。こういった諸点について報告があった。

#### 1995年9月例会

日 時：9月30日(土) 14:10~16:50

会 場：豊中市立岡町図書館

テーマ：『日本十進分類法新訂9版』を概観する

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

前川和子氏(大谷女子大学図書館)

田村俊明氏(大阪市立大学附属図書館)

野口恒雄氏(佛教大学図書館)

9月に入って、日本の標準分類表であるNDC 9版がようやく刊行された。実に17年ぶりの改訂版になる。9版は全国書誌に対応できる書誌分類表をめざして作成されたと表明している。また、造本は2分冊とし、使い易さに配慮しているようだ。9版の全体を概観し構成や改訂内容等について批評した。

#### 1995年10月例会

日 時：10月20日(金) 18:30~20:30

会 場：大阪府職員会館

テーマ：BC2とNDC

発表者：光富健一氏(東京理科大学図書館)

利用者に有用な主題検索システムはいかに構築すべきか。主題分析を放棄した非統制自然語検索、あるいは個別概念間の関係付けを放棄した検索システムが闊歩する。そのシステム構築過程にはファセット理論を深層に保持する必要があると思われ、BC2の構造を再考した。また主題検索におけるNDCの蘇生はファセット理論の包含なくしてはあり得ない。

#### 1995年11月例会

本例会は、日本図書館研究会研究例会も兼ねており、下記のようにNDC 9版説明会として開催された。

「NDC新訂9版（関西地区）説明会」

日 時：11月24日（金）14:00～17:00  
 会 場：桃山学院カントベリーホール（昭和町学舎）  
 講 師：石山洋氏（日本図書館協会分類委員会委員長）ほか分類委員会委員  
 主 催：日本図書館協会，日本図書館研究会

1995年12月例会

日 時：12月9日（土）14:10～16:50  
 会 場：大阪市立弁天町市民学習センター  
 テーマ：人権関連の資料・情報システム - アジア・太平洋人権情報センターを例にして -  
 発表者：川村暁雄氏（アジア・太平洋人権情報センター）

アジア・太平洋人権情報センターにおける資料・情報システムについて紹介があった。センターは人権の専門図書館として独自のシステムを構築しつつある。その特徴は、コンピュータによるソーティングと出力を前提としたシステム、人権に特化した構造的な分類、多言語対応にある。これらは、国際的な人権情報の標準化を図る HURIDOCs（本部：ジュネーブ）が制定したフォーマットに準拠したものである。さらに現在開発中の分類とリンクした独自のディスクリプタシステムや、今後の課題である WWW との接続、提案型情報提供についても言及があった。

1996年1月例会

日 時：1月27日（土）14:10～16:50  
 会 場：豊中市立岡町図書館  
 テーマ：日本十進分類法新訂9版の検証  
 発表者：吉田暁史氏（帝塚山学院大学）  
     前川和子氏（大谷女子大学図書館）  
     田村俊明氏（大阪市立大学附属図書館）  
     野口恒雄氏（佛教大学図書館）

NDC 新訂9版の内容を分析し、改訂目的をどの程度実現しているのかを検証した。主として事例に基づき報告があった。

1996年3月例会

日 時：3月16日（土）14:10～16:40  
 会 場：大阪市立天王寺図書館  
 テーマ：デュイ再考  
 発表者：田口瑛子氏（京都精華大学）  
 近著『文化の使徒』は、その第3部を中心に、十進分類法で、また最初の図書館学校を創ったことで知られるデュイの、あまり知られていない多様な側面を紹介している。女性とデュイという観点から、訳書の紹介もかねて、デュイの業績、人間像に関する報告があった。あわせて Wiegand の新著に関する紹介も行われた。  
 参考文献：ディー・ギャリックソン著；田口瑛子訳『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会、1876-1920年』日本図書館研究会、1996

1996年4月例会

日 時：4月28日（日）13:00～16:00  
 会 場：大阪市立弁天町市民学習センター  
 テーマ：Gorman 研究（1）パリ原則および AACR1 第1部と初期の Gorman  
 発表者：古川肇氏（中央大学図書館）  
 Michael Gorman は、何よりもまず AACR1（英国版）に対する卓抜した批判者として登場した。Gorman は、まず基本記入否定の観点から、AACR1 第1部およびその依拠するパリ原則を、遅くとも 1977 年には批判した。アクセスポイントという用語は Gorman が作ったが、その背景には、基本記入の標目と他の標目とを区別する必要がないという考え方があった。また団体著者の著者性や逐次刊行物の標目選定、標目の形式等に関して AACR1 を批判した。パリ原則についても、個々の原則に関して批判を行った。このように基本記入や団体標目に関して先駆的な業績のある Gorman だが、パニッツィ、カッター、ルベツキーといった第一級の理論家に比べれば、基礎理論面での貢献はやや少ないといえ

よう。

### 1996年5月例会

日時：5月25日(土) 14:00～17:00

会場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：Gorman 研究(2) 最近の Gorman 論説

発表者：志保田務氏(桃山学院大学)ほか

前は初期 Gorman の標目関係についての研究報告であったが、今回は最近の Gorman を取り上げる。下記参考文献等にもとづき、目録の将来、整理委託、といったことに関する Gorman の最近の論説を検討した。

#### 参考文献

マイケル・ゴーマン著；高鷲忠美，岩下康夫訳  
AACR2 以後：英米目録規則の将来『整理技術研究』35, 1995.9

マイケル・ゴーマン述；志保田務，岩下康夫訳  
目録世界の未来への招待『整理技術研究』36, 1996.1

Michael Gorman. The corruption of cataloging. *Library Journal*. Vol.120, no.15, 1995.9.15

Walt Crawford and Michael Gorman. *Future Libraries : Dreams, Madness, and Reality*. Chicago : American Library Association, 1995.

Michael Gorman. *The Concise AACR2*. Chicago : American Library Association, 1981.

### 1996年6月例会

日時：6月28日(金) 18:00～21:00

会場：大阪市立弁天町市民学習センター

テーマ：Gorman 研究(3) Gorman 関係書誌の紹介

発表者：吉田暁史(帝塚山学院大学)

AACR2 以後の Gorman 論文を 20 点ほど取り上げ、紹介と検討を行った。特に MARC の将来および著作間関連性に関して言及があり、このレベルでは Gorman の寄与は少ないとした。著

者名の統制形を 1 つに定める必要性の有無、テイレットの著作間関連性把握の批判、著作間関連性は統一タイトルによって行うのかどうか、といった諸点について若干独自に考察した。

#### 参考文献

Michael Gorman. New rules for new systems. Should we scrap all bibliographic codes and standards and start a new? *American Libraries*. 12 (2), 1981.2, p.71-72.

Michael Gorman. Descriptive cataloguing : its past, present, and future. In: *Technical Services Today and Tomorrow* / Michael Gorman and associates. Englewood, Colo. : Libraries Unlimited, 1990. p.63-73.

### 1996年7月例会

日時：8月10日(土) 14:00～16:40

場所：大阪市立中央図書館

テーマ：書誌コントロールの概念をめぐって

発表者：根本彰氏(東京大学大学院教育学研究科)

最近、デジタルネットワーク関連の事象が展開するなかで、図書館サービスのアイデンティティが問われることが多くなっている。発表者は、図書館をめぐる制度やサービスの根幹にある概念を指して「書誌コントロール」という言葉を使用してきたが、この状況にあわせてさらにこの概念を鍛え直すことが必要なことを感じている。訳出した『電子図書館の神話』の意義にも触れつつ、書誌コントロールについて考察した。

#### 参考文献

根本彰 Patrick Wilson の書誌コントロール論『書誌索引展望』9(4), 1985.11, p.1-16.

根本彰 全国書誌と全国総合目録：アメリカにおける書誌コントロール概念成立の背景 所収：日本図書館学会研究委員会編『図書館ネットワークの現状と課題』日外アソシエーツ, 1991.

p.59-85.

根本彰 作品とテキスト：書誌コントロールの対象について 所収：三浦逸雄・朝比奈大作編『現代レファレンスサービスの諸相』日外アソシエーツ, 1993. p.194-217.

小寺正一 ポスト書誌コントロールの世界『科学技術文献サービス』 91, 1990, p.15-22.; 92, 1990, p.35-40.

### 1996年8月例会

日 時：8月23日(金) 18:40~21:00

会 場：大阪市立北市民教養ルーム

テーマ：Gorman 研究(3) Michael Gorman における目録法上の提言をめぐって

発表者：岩下康夫氏(長崎純心大学)

Gorman による目録法上の以下の提言を紹介し、これに対する注解があった。

提言1：目録は図書館の中心に位置すべきである。

提言2：基本記入は否定されるべきである。

提言3：記述対象の標準化の問題は、複数のレコードシステムのもとで、無意味化されるべきである。

提言4：MARC は改訂されるべきである。

とりわけ提言3に関して注目すべき論及があった。著作概念は一意に決めがたいと主張する発表者の立場から、記述対象の標準化を行うことには意味がないというものであり、この面でGorman を評価できるとする。

参考文献

1) マイケル・ゴーマン；志保田務, 岩下康夫訳 目録世界の未来への招待 『整理技術研究』 36, 1996.1, p.23-25

2) マイケル・ゴーマン著；高鷲忠美, 岩下康夫訳 AACR2 以後：英米目録の将来 『整理技術研究』 35, 1995.9, p.1-5

3) Michael Gorman. The corruption of cataloging : outsourcing erodes the 'Bedrock'

of library science. *Library Journal*. 120(15), 1995, p.32-34.

4) 松林正己 RAK 紹介のための文献解題の展望『TP&D フォーラムシリーズ』 5, 1996.7, p.15-35

5) 丸山昭二郎編『目録法と書誌情報』雄山閣, 1993.06.

### 1996年10月例会

日 時：11月7日(木) 18:40~21時

会 場：日本図書館研究会事務所

テーマ：「資料組織」の意味と範疇：新省令、整理科目関係の内容検討

発表者：志保田務氏(桃山学院大学)

1996年8月改訂の司書科目で、「概説」、「演習」として登場している「資料組織」なるものの意味と範疇を、すでに市民権を得ている「資料組織化」、「資料組織法」と比較し検討した。「資料組織」「資料組織化」「資料組織法」といった語が、図書のタイトルとしていつごろどのように出現してきたか、そしてその中で各著者がどのような定義を与えているか、また辞典等ではどのように定義されているか、といったことを詳細に考察した。その結果、「資料組織」なる語は、新省令にもとづく科目名称としてはなはだ不適當であるという結論を下した。

### 1996年12月例会

日 時：12月21日(土) 14:00~16:30

会 場：精華生涯学習ルーム

テーマ：日本全国書誌の改善計画について

発表者：和中幹雄氏(国立国会図書館)

国立国会図書館の「全国書誌サービス改善計画」について、11月26日に開催されたJAPAN/MARC 利用者懇談会での討議内容を中心に報告した。またネットワーク時代における国立国会図書館の書誌サービスおよび書誌調整にかかわる将来の課題についても言及があった。

改善の要点は以下の通り。

- (1)データの標準化等（NDC 9版の採用，NCR1987年版の採用，タイトル，著者等の読みの付与基準の改善，典拠データの提供等）
- (2)アクセスポイント等の拡充（副書名，シリーズ名のすべての読みの付与，内容細目データへの区切り記号の導入，等）
- (3)非図書資料等の収録（CD-ROMを含むすべての非図書資料のJAPAN MARCへの収録等）
- (4)タイムラグの短縮
- (5)提供方式等の改善検討（JAPAN MARC(M)の改訂，オンライン提供の拡充等）

以上のようにかなり大幅な改善が実施されることになる。

#### 1997年1月例会

日時：1月15日（水）15:00～17:00

会場：桃山学院昭和田学舎

テーマ：自然語・統制語の索引と検索：ハンゲル文献の索引と検索

発表者：崔錫斗氏（梨花女子大学）

韓国語のシソーラスを開発し，書誌データベースおよび全文データベースを対象として，ハンゲル文献の索引と検索を行っている。索引では統制語のほか自然語も併用している。こういった韓国における情報検索の状況に関する研究と実践活動の報告があった。骨子は(1)ハンゲルの独自性からくる問題点，(2)全文データベースの構築方法（全データベースを対象とした1次アクセスと，検索結果の個々の資料を対象とする2次アクセスとに分ける），(3)索引語の抽出方法，(4)漢字を含むテキストからのハンゲル読みの自動生成，(5)ハンゲルによるシソーラスの作成，といった諸点である。

崔氏は，韓国で図書館情報学の大学を修了後来日し，図書館情報大学で修士課程を，筑波大学で電子工学系の博士課程を修了。韓国帰国後，現大学で文献情報学科長をつとめる。

#### 1997年3月例会

日時：3月27日（木）19時～21:30

会場：大阪市立阿倍野市民学習センター

テーマ：インターネットにおけるリファレションデータベース構築の可能性

発表者：浅井勇夫氏（大阪府立大学工学部）

出席者：中村恵信（大阪府公文書館），田村俊明（大阪市立大学学術情報総合センター），渡辺隆弘（神戸大学図書館），前川和子（大谷女子大学），蔭山久子（帝塚山短大図書館），田窪直規（近畿大学），吉田暁史（帝塚山学院大学）

内容

- (1)文献参照関係の基本概念
- (2)計量文献学の発展
- (3)Web情報の増大とその特徴
- (4)Web情報間の関連性
- (5)今後の課題

発表者は，ある文献を中心として，それが引用した文献群と，非引用文献群とを統一的に把握したリファレションという概念を主張した(1984)。ちなみにガーフィールドは後者のみを対象とした。今日のインターネット環境のもとで，リファレションデータベースを構築する可能性について具体的な構想の提示があった。

#### 1997年4月例会

日時：4月25日（金）18:45～20:45

会場：大阪市立北市民教養ルーム

テーマ：和古書整理に関する日米目録規則の比較

発表者：マルラ俊江氏（カリフォルニア大学ロサンゼルス校東亜図書館整理部）

出席者：野口恒雄（佛教大学），北克一（大阪市大），日垣敦子（帝塚山短大図書館），渡辺顕信（同志社大学学術情報センター），渡辺隆弘（神戸大学図書館），中村恵信（大阪府公文書館），前川和子（大谷女子大），宮尾裕子（大阪体育大）



学図書館), 志保田務(桃山学院大学), 吉田暁史(帝塚山学院大学), マルラ俊江

米国で和古書整理を行うにあたってはそれ専用の目録規則は存在しない。そのため, AACR2 ないしは Descriptive Cataloging of Rare Books を参考にせざるをえない。しかし, それらだけに依拠すると日本の目録規則にのっとって作られた書誌データとは全く相容れない書誌データを作ってしまうことも起こり, 同じ図書をもとにしていることすらわからないことがある。上述の2つの米国の目録規則に加えて, RLG Chinese Rare Books Project が1995年1月に改訂した Cataloging Guidelines for Creating Chinese Rare Book Records in Machine-readable Form, および日本の目録規則として日本目録規則1987版改訂版と長澤規矩也著『和漢古書目録法』とを比較し, その規則の違いから起こるデータ内容の違いについて言及した。

#### 1997年5月例会

日時: 6月2日(月) 18:45~20:45  
会場: 大阪市立北市民教養ルーム  
テーマ: 新カリキュラムにもとづく「資料組織演習」教科書の概要と問題点  
発表者: 吉田憲一氏(天理大学)

吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

出席者: 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 前畑典弘(京都橘女子大非常勤), 北西英里(大阪府盲人福祉センター), 田窪直規(近畿大学), 北克一(大阪市大), 中村恵信(大阪府公文書館), 蔭山久子(帝塚山短大図書館), 前川和子(大谷女子大学), 吉田憲一, 吉田暁史

吉田憲一氏ほか4名で新カリキュラムにもとづく演習教科書(日本図書館協会刊)を現在執筆中である。シリーズとして刊行されるので以下のような制約がある。

JLA24 単位案の内容に準拠させる。

すでに資格取得している人が, 新カリキュラムの新しい内容を自学自習できるようにもする。

1ユニットを1時間に対応させ, 全体を50ユニットとする。

演習の基本的な考え

この科目はユニット方式には向かない

編集委員会原案は, 新カリキュラムの方針を取り入れた新しい内容とはいえない。

パソコンを使用したコンピュータ目録演習については, FDを付録として付ける案は認められなかった。

講義科目との調整。時間数のアンバランス。講義科目の内容の陳腐さ。

目録部分の問題点

複合媒体資料の扱い, 等

分類件名部分の概要

#### 1997年7月例会

日時: 7月12日(土) 14:10~16:30

会場: 大阪市立精華生涯学習ルーム

テーマ: ある「資料組織概説」執筆の試み

発表者: 古川肇氏(中央大学図書館)

出席者: 山下信(武庫川女子大), 田村俊明(大阪市立大学学術情報総合センター), 柏田雅明(帝塚山学院大学図書館), 向畑久仁(姫路獨協大), 吉田憲一(天理大学), 吉田英機(摂南大学図書館), 前畑典弘(京都橘女子大非常勤), 蔭山久子(帝塚山短大図書館), 槻本正行(流通科学大学図書館), 宮生裕子(大阪体育大学図書館), 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 田窪直規(近畿大学), 吉田暁史(帝塚山学院大学), 古川肇

大学の通信教育のテキストを執筆中の現時点において, 類書が多い中で独自の特色として追求したい2点, すなわち, 体系性と理解され易さを両立した構成, および過不足ない用語定義の課題を中心に発表があった。あわせて, 執筆する過程で気づいたNCRの誤りと思われる箇所を指摘して参考に供した。体系性に関しては,

「資料に関する記録の組織化」と「資料自体の組織化」とに大きく分けるなど、論理的な体系化をはかっていることに注目すべき点がある。

### 1997年8月例会

日 時：8月27日(水) 14:10~16:45

会 場：大阪府立中央図書館

テーマ：施設見学と目録システムの概要説明

発表者：前田章夫課長，池内美和子(資料情報課)

出席者：田窪直規，松川隆弘(大阪女子短期大学図書館)，久保恭子(甲南女子高校図書館)，北西英里(大阪府盲人福祉センター)，前畑典弘，谷口美代子，吉田暁史・川尻文彦(帝塚山学院大学)，他に帝塚山学院大学学生12名ほど

1996年5月に竣工した府立中央図書館の見学を行った。次に府立図書館における目録システムの概要について、目録データの構造、検索システムといったことを中心に説明があった。

### 1997年10月例会

日 時：10月18日(土) 14:15~16:30

会 場：大阪市立精華生涯学習ルーム

テーマ：資料組織概説・同演習について - 妥協と修正 -

発表者：田窪直規氏(近畿大学)

出席者：田窪直規，蔭山久子(帝塚山短大図書館)，吉田憲一(天理大学)，吉田暁史(帝塚山学院大学)，前畑典弘，中村恵信(大阪府公文書館)

本年度のメインテーマである「司書課程科目改訂と資料組織法」の4回目にあたる。新司書講習科目の評価との関係で、資料組織概説・同演習を位置づけ、これらの科目の構成案を提出する。その際には、科目の「ねらい」に記されていることとある程度妥協を図り、あまりにもドラスチックな変革案は避けるように努力する。このような基本方針のもと、以下のような指摘

があった。

(1)文部省の提示する新科目構想は、利用者サービスの発展、コピーカタロギングの普及、経営論・生涯学習論の導入、等で80年代の図書館界の変貌に應えるという観点からはまずまずである。

(2)21世紀の情報メディアの組織化を考える場合、情報メディアが複雑化しつつあり、また自館組織情報の作成も考慮しないといけなくなるので、情報の組織化能力と書誌コントロール能力が重要となってくる。

(3)「情報管理」科目が消滅した。その代わり「情報検索演習」が新設されたが、前者は索引・抄録を構築する立場からであり、後者は利用する立場からの科目である。構築する技術を教えなくてよいのか。

(4)分類と目録を統合・一体化して情報組織化という方向の教育が必要である。両者を統合した科目になっている点は評価できる。

最後に具体的な科目内容の提言があった。

### 1997年11月例会

日 時：11月29日(土) 14:15~16:30

会 場：大阪市立精華生涯学習ルーム

テーマ：フランスの資料組織法について

発表者：槻本正行氏(流通科学大学図書館)

出席：前川和子(大谷女子短大)，蔭山久子・日垣敦子(帝塚山短大図書館)，吉田暁史(帝塚山学院大学)，宮生裕子(大阪体育大学図書館)，槻本正行

フランスでは目録法に関して、AFNOR = Association Francaise de Normalization の諸規則がある。具体的にはZ44の各種規格として分割制定されている。分類表としては、UDCとDDCがよく用いられている。件名法に関しては、RAMEAU = Repertoire d'Autorite de Matieres Encyclopediques et Alphabetiques Unifie と称するシソーラススタイルの件名標目表がある。

以上の目録・分類関係ツールの歴史と現状に関する紹介のほか、BN-OPALE, OCLC-Europe, SIBIL-France といったフランスにおける書誌ユーティリティの現状等に関する説明があった。

### 1997年12月例会

日時：12月20日(土) 14:15～16:30

テーマ：司書講習科目改訂と資料組織法(まとめ1)

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

会場：大阪市立精華生涯学習ルーム

出席者：吉田暁史, 野口恒雄(佛教大学), 前畑典弘, 向畑久仁(姫路獨協大学図書館), 中村恵信(大阪府公文書館), 前川和子(大谷女子大学), 田窪直規(近畿大学)

本年のメインテーマである「資料組織法」について、志保田氏による科目名称等の批判, 吉田憲一氏等による教科書執筆の問題点, 古川氏による教科書執筆の概略, 田窪氏による当該科目の問題点, と昨年末より4回の例会を開いた。こういった発表のうち, とりわけ田窪氏の科目レジュメ案を発表者なりに修正した案をもとに, 具体的な科目内容に関する提案があった。

### 1998年1月例会

日時：1月31日(土) 14:15～16:30

会場：大阪市立精華生涯学習ルーム

テーマ：司書講習科目改訂と資料組織法(まとめ2)

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

出席者：蔭山久子(帝塚山短大図書館), 前川和子(大谷女子短大), 田窪直規(近畿大学), 宮生裕子(大阪体育大学図書館), 中村恵信(大阪府公文書館), 久保恭子(甲南女子高校図書館), 前畑典弘, 山野美贇子(大阪府立大学総合情報センター), 吉田暁史

日本図書館研究会研究大会は, 1998年3月1日～2日, 京大会館において開催と決まった。当

グループも1日に発表する。先12月に発表した内容のほか, その後の討議の結果もふまえた最終的なまとめが報告された。

### 1998年3月例会

日時：3月28日(土) 14:15～16:30

会場：大阪市立精華生涯学習ルーム

テーマ：BSHを利用したOPACの主題検索(1)

発表者：渡辺隆弘氏(神戸大学附属図書館)

出席者：吉田憲一(天理大学), 前川和子(大谷女子短大), 光斎重治(中部大学図書館), 蔭山久子・日垣敦子(帝塚山短大図書館), 北克一(大阪市立大学), 吉田暁史(帝塚山学院大学), 渡辺隆弘(神戸大学図書館)

1998年刊行予定のBSH4版は, 参照構造をソース・スタイルに再編成するなど, 大幅な改訂となっている。BSH4版の編集用機械可読ファイルを使用して, 参照関係を活用した主題検索を支援する実験システムを作成した。検索システムの作成と評価, および件名典拠ファイルの構築について発表があった。

### 1998年4月例会

日時：4月25日(土) 14:15～16:30

会場：大阪市立精華生涯学習ルーム

テーマ：BSHを利用したOPACの主題検索(2)

発表者：渡辺隆弘氏(神戸大学附属図書館)

出席者：蔭山久子(帝塚山短大図書館), 日垣敦子(佛教大学図書館), 前畑典弘, 吉田憲一(天理大学), 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 吉田暁史(帝塚山学院大学)

3月例会では, 1998年刊行予定のBSH4版の編集用機械可読ファイルを使用した, 件名標目による主題検索支援実験システムの概要を発表した。今回は, タイトルキーワード検索と比較しつつ当システムの評価を試みた。

なお当報告に関連して, 発表者による下記の論文があるので参照していただきたい。

渡辺隆弘 件名標目による OPAC の主題検索  
『TP&D フォーラムシリーズ』8号(1999)

### 1998年6月例会

日 時：6月27日(土) 14:30～17時  
会 場：同志社大学図書館司書課程資料室  
テーマ：「資料組織概説」について - その編集方針と構成 -  
発表者：大城善盛氏(同志社大学)  
倉橋英逸氏(関西大学)  
出席者：大城善盛, 倉橋英逸, 渡辺信一(同志社大学), 武内隆恭(京都橘女子大), 前畑典弘, 光斎重治, 吉田憲一(天理大学), 野口恒雄(佛教大学), 日垣敦子(佛教大学図書館), 吉田暁史(帝塚山学院大学)

発表者らは下記の教科書を執筆したが, 編集方針等に関し以下のような報告があった。

1. 「資料組織概説」に対する基本的な考え方  
書誌コントロールと主題コントロールという概念を骨組みとして教科書を構成した。レファレンスと目録法はともに書誌データベースを基本とするが, 前者は使う側の立場であり, 後者は作る側の立場から扱わねばならない。
2. 「資料組織演習」との関係
3. 各章の構成に対する考え方

当教科書では主題アクセスに関する説明に特色があると考えているが, 事前結合と事後結合, シソーラスといったことを積極的に教育内容として取り入れた。

#### 参考文献

大城善盛, 倉橋英逸, 岡田靖, 渡部満彦共著『資料組織概説』(樹村房, 1997)(新図書館学シリーズ 9)

### 1998年8月例会

日 時：9月5日(土) 14:15～16:30  
会 場：大阪市立精華学習ルーム

テーマ：資料組織概説各教科書の比較検討(1)  
発表者：吉田暁史(帝塚山学院大学)ほか  
出席者：光斎重治, 久保恭子, 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 吉田暁史

新カリキュラム対応「資料組織概説」の教科書は下記3冊が出そろったが, これらを比較検討した。

1. 資料組織概説 / 柴田正美著. -- 日本図書館協会, 1998.2. -- (JLA図書館情報学テキストシリーズ; 9)
2. 資料組織概説 / 岩淵泰郎編著. -- 東京書籍, 1998.2. -- (新現代図書館学講座; 10)
3. 資料組織概説 / 大城善盛, 倉橋英逸, 岡田靖, 渡部満彦共著. -- 樹村房, 1997.12. -- (新図書館学シリーズ; 9)

### 1998年9月例会

日 時：9月19日(土) 14:30～17時  
会 場：神戸市立東灘区民センター  
テーマ：資料組織概説のシラバス構築に向けて  
発表者：渋谷嘉彦氏(相模女子大学)  
出席者：野口恒雄(佛教大学), 久保恭子, 前川和子(大谷女子短大), 田窪直規(近畿大学), 山中秀夫(天理大学), 吉田暁史(帝塚山学院大学), 渋谷嘉彦

資料組織概説のシラバスを考える前提として, 資料組織論と情報(蓄積)検索論の区別と連関に関する理論的な検討と, 改訂された司書講習科目の中で, 資料組織概説, 資料組織演習, 情報サービス概説, 情報検索演習, および情報機器論の棲み分けに関する検討に向けて問題提起した。具体的には以下のような指摘があった。

1. 資料そのものの組織化, 次に書誌レコードの組織化について教える。
2. 書誌レコードの組織化については, 書誌記述論と書誌アクセス論に分け, 書誌アクセス論では, 著者, タイトル, 主題によるアクセスをまとめて扱う。

3. 省令科目は司書養成の基礎あるいは導入教育として位置づけられるべきものであり、したがって科目および単位数は必要最小限のものとする。

4. 司書講習，司書課程，図書館・情報学科，大学院のレベルと段階的に考えるべきであり，省令科目はこのうち司書講習のレベルと考えられる。

#### 参考文献

渋谷嘉彦「資料組織法」の新シラバス構築に向けて 『短期大学図書館研究』12号, 1992

渋谷嘉彦「連載：情報に関する資格と専門職(3) 司書」『情報の科学と技術』48巻8号, 1998.8

#### 1998年10月例会

日 時：10月17日(土) 14:30～16:30

会 場：日本図書館研究会事務所

テーマ：資料組織概説教科書の比較検討(2)

発表者：蔭山久子氏(帝塚山短期大学図書館)

前川和子氏(大谷女子短期大学)

吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

出席者：蔭山久子，前川和子，前畑典弘，吉田憲一(天理大学)，吉田暁史

蔭山：各教科書の特色に関する考察

前川：(1)『目録と分類』の著者，チャンは今どうしているか。ケンタッキー大学におけるチャン担当の「知識の組織化」2 (Organization of Knowledge)シラバスから教育内容を探る。Subject Access と Description and Encoding という2分野に大別される。記述およびコーディング分野では，固有名典拠コントロール，メタデータ，USMARC Format等のコーディングといった章から成り，従来の「目録法」という範囲を超えている。

(2)吉田の作成した「各項目比較」をさらにまとめると，多くの教科書に書かれていない項目が，主題索引法関係では，「自然語と統制語」「自然語による索引法」「事前結合索引と事後結合索引」「意味論と統語論」などになっている。これら

はそれほど重要なことではないのだろうか。

吉田：『資料組織概説』(東京書籍)オンライン目録(第5,6章)を中心に報告した。

#### 1998年11月例会

日 時：11月28日(土) 14:30～17時

会 場：大谷学園帝塚山学舎

テーマ：『資料組織概説』(東京書籍)について  
- オンライン目録を中心として -

発表者：石井啓豊氏(図書館情報大学)

出席者：田窪直規，渡辺隆弘(神戸大学図書館)，前川和子(大谷女子短大)，志保田務(桃山学院大学)，石井啓豊，吉田暁史(帝塚山学院大学)

『資料組織概説』(東京書籍)に関して，教科書全体の構成に関する説明のほか，特にオンライン目録(第5,6章)を中心として詳しい報告があった。具体的な発表内容は下記のとおり。

1. 教科書執筆に際する基本的な枠組みとして，(1)情報構造，目録データベースの概念モデル，目録の標準化，互換性といったことに重点をおく，(2)目録データベースを中心としてさまざまな検索が成り立つ，(3)コンピュータについての最小限の知識を盛り込む，といったことを考えた。
2. 目録の作成から検索といった全体の流れを把握できるようにこころがけた。
3. データベース，全体の目録システム，目録規則の関係を理解してもらおうと考えた。
4. 目録規則については，基本的にはマニュアル環境にそって作られており，コンピュータ目録とどう整合して教えるかが難しかった。
5. 一般の情報検索にはない目録特有の検索機能，つまり集中機能を強調した。
6. MARC フォーマット自体をあまり詳しく説明する必要はないと判断した。

#### 1998年12月例会

日 時：12月12日(土) 14:15～16:30

会場：大阪市立精華学習ルーム

テーマ：JLA『資料組織概説』について - 書誌コントロールを中心に -

発表者：柴田正美氏（三重大学）

出席者：田窪直規（近畿大学），前畑典弘，北克一（大阪市大），村上泰子（梅花女子大），池内美和子（大阪府立中央図書館），吉川逸子（大阪府立中央図書館），柴田正美，吉田暁史（帝塚山学院大学）

東京書籍および樹村房の『資料組織概説』と比べて特徴的なことは、「書誌コントロール」に多くのページを割いていることと思われる。省令の「司書の講習科目のねらいと内容」によっても書誌コントロールには触れることになっており、それなりのページをあてることは当初から予定していた。しかし執筆の過程で個別図書館における目録作成作業を大きく変容させる可能性のある考え方としての書誌コントロールの重要性に気づき、この部分を充実させる結果となった。そのため、分類に関する記述の割合は低下し、件名については全く触れていないという欠陥も生み出した。件名については、BSHが改訂寸前ということもありあえて触れなかった。書誌ユーティリティの利用によって標準的な書誌的記録を入手することになるが、図書館によって必要なデータは異なるので、それぞれの図書館においてどのような目録データを作成し、どのように提供していくかを考えるべきである。このような観点から個別館にとっての書誌コントロールという視点をまず強調した。そして個別図書館の力の集積として総合目録があり、複数の総合目録の共同化で、国レベルの書誌コントロールが生まれるという考え方を基礎に執筆した。

#### 1999年1月例会

日時：1月23日（土）14:15～16:30

会場：大阪市立精華学習ルーム

テーマ：資料組織法からメディアの構成へ

発表者：志保田務氏（桃山学院大学）

出席者：渡辺隆弘（神戸大学附属図書館），光斎重治，藤井千年（大手前女子大），中村恵信（大阪府公文書館），前畑典弘，平井尊士（兵庫大学），前川和子（大谷女子短大），垣内弥生子（大阪府教育センター），久保恭子（甲南女子高校図書館），蔭山久子（帝塚山短大図書館），谷本達哉（羽衣学園短大），伊藤順（愛知大学），志保田務（桃山学院大学），吉田暁史（帝塚山学院大学）

1. 省令における整理関係科目の変遷（司書，司書教諭）

2. 最近の改正の特徴

図書館法

整理科目の統合と減単位

情報サービス科目の統合

情報系科目の強化

学校図書館法

科目構造の変更

資料選択・整理科目の合一

整理科目の減単位

メディア・情報系の増強

3. 『資料組織法』（第一法規）における先行と妥協

4. 『資料組織論』（放送大学）における実験

5. 『分類・目録法入門』への副題「メディアの構成」の新設

6. 省令改正と研究者，教育，テキストにおける対応

#### 1999年2月例会

日時：2月20日（土）14:30～17時

会場：大阪樟蔭女子大学衣料情報室

テーマ：AATの成立過程とその内容

発表者：宮崎幹子氏（奈良国立博物館）

出席者：田窪直規（近畿大学），渡辺隆弘（神戸大学図書館），吉田暁史（帝塚山学院大学），蔭山久子（帝塚山短大図書館），山本知子（システ

ムズ・デザイン株), 村井正子(システムズ・デザイン), 浜田行弘(関学図書館), 谷津理映子(T&T Design Lab.), 千速敏男(成安造形大学造形学部), 吉見真樹(日本科学技術振興財団), 横田真一(日本科学技術振興財団), 遠藤隆明(日本科学技術振興財団), 高橋晴子(大阪樟蔭女子大学衣料情報室), 住広昭子(東京国立博物館資料部), 川口雅子(東京芸術大学大学院), 守屋祐子(千里文化財団), 宍戸芽衣(大阪教育大学大学院), 中井康之(西宮市大谷記念美術館), 井溪明(堺市博物館), 赤尾栄慶(京都国立博物館), 坂本昇(伊丹市昆虫館), 向畑久仁(姫路獨協大学), 宮崎幹子(奈良国立博物館)

美術分野のシソーラスである Art and Architecture Thesaurus (AAT)の成立過程と内容に影響を与えた諸要素を整理し, その特質について発表があった。AAT は 1980 年代に開発され, 1989 年には全 3 巻として出版され, 1994 年には約 90,000 語を含む第 2 版全 5 巻が出版された。構造的には MeSH のモデルに基づき, 用語の収集にあたっては LC 件名との互換性が重視された。オンラインでの利用も可能となっているが, 今回取り上げたのは冊子体版である。階層表示とアルファベット順排列表示とからなり, 階層表示では, 7 つのファセットと 33 の階層(ファセットの下位区分)にまず大別される。各下位区分のもとでディスクリプタが最上位語から最下位語までが階層的に配置される。ただし同じアレイ内ではアルファベット順に配置される。各ファセット各ディスクリプタには記号が付与されており, 体系的な表示を行う。アルファベット順排列表示部では, SN, UF, RT 等は表示するが, BT, NT は表示しない。このあたりは MeSH と同様である。

なお, 本例会はアートドキュメンテーション研究会との共同開催である。

### 1999年3月例会

日時: 3月27日(土) 14:15~16:30

会場: 大阪市立精華学習ルーム

テーマ: テーマ: テクストの機能と書誌的要件

発表者: 伊藤順氏(愛知大学)

出席者: 田窪直規(近畿大学短期大学部), 藤井千年(大手前女子大), 吉田憲一(天理大), 中村恵信(大阪府公文書館), 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 蔭山久子(帝塚山短期大学図書館), 光斎重治, 山野美贇子(大阪府大総合情報センター), 前川和子(大谷女子短期大学), 垣口弥生子(大阪府教育センター), 北克一(大阪市立大学), 志保田務(桃山学院大), 向畑久仁(姫路獨協大), 伊藤順(愛知大学), 平井尊士(兵庫大学), 吉田暁史(帝塚山学院大学)

書誌の対象のテキストの機能を情報の実用性と価値の有用性という利用軸をたてて考察し, 書誌記述の方法の根拠をエスカルピの機能論をも手がかりとして探る。

例会終了後, 光斎重治, 藤井千年, 前川和子各氏の教職就任祝いを開催(高島屋ローズルーム)。

### 1999年6月例会

日時: 6月26日(土) 13:45~16:45

会場: 近畿大学会館

テーマ: 『情報検索理論の基礎』をめぐって

発表者: 中村幸雄氏(インフォコム技術事務所)

出席者: 笠井詠子(帝塚山学院大学), 吉田暁史(帝塚山学院大学), 前川和子(堺女子短期大学), 久保恭子(元甲南女子大学図書館), 田窪直規(近畿大学), 浜田行弘(関学図書館), 山本伸一(神戸大学院生), 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 前畑典弘, 中村幸雄

当グループでは, 中村幸雄著『情報検索理論の基礎』(共立出版, 1998)の輪読会を行ってきた。その過程で著者に疑問点等の提出もしてきた。今回著者をお招きして, 本書の概要と執筆

目的, 当グループとのやりとり, 等に関して報告していただいた。

### 1999年7月例会

日 時: 8月7日(土) 14:30~17時

会 場: 日本図書館研究会事務所

テーマ: メタデータ - 文献紹介 -

発表者: 渡辺隆弘氏(神戸大学図書館)

出席者: 蔭山久子・篠原寛頼(帝塚山大学図書館), 山本伸一(神戸大学大学院生), 久保恭子, 前川和子(堺女子短期大学), 渡辺隆弘, 戸上良弘・吉田暁史(帝塚山学院大学)

本年度以降の重要なテーマの一つとして, 当グループはメタデータをとりあげるが, その第1回目として, 主に日本語文献を対象として文献紹介を試みた。多数の日本語論文とネットワーク情報源をもとに, メタデータに関する実践・研究動向を探った。メタデータに関する定義であるが, 本来あらゆる資料, 情報源を対象とするはずであるが, 実際にはネットワーク情報源を前提としていることが多い。メタデータの策定例としては, さまざまなものがあるが, やはりその中心は Dublin Core である。1995年以降の Dublin Core に関する会議の紹介があり, 「コアエレメント」という考え方, およびそこで制定されている記述要素の具体的内容が示された。

### 1999年10月例会

日 時: 10月30日(土) 14:30~17時

会 場: 大阪市立阿倍野市民学習センター

テーマ: BSH第4版の検討 その1: 序説を読む

発表者: 志保田務氏(桃山学院大学)

出席者: 蔭山久子(帝塚山短大図書館), 前川和子(堺女子短期大学), 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 光斎重治(愛知大学), 北克一(大阪市立大学), 笠井詠子(帝塚山学院大学), 前畑典弘,

豊田邦雄(島根県立女子短大), 野口恒雄(佛教大学), 松井純子(大阪芸大), 田窪直規(近畿大学), 向畑久仁(姫路獨協大学), 志保田務, 吉田暁史(帝塚山学院大学)

BSHが16年ぶりに改訂され, 第4版が刊行された。当グループでは, 今年度の主要研究テーマの一つとして BSH 第4版を取り上げるが, 第1回目は序説を検討した。件名標目の採録方針, 適用対象とする図書館, といった総論的なことから始まり, 細目や限定語の使用法, 階層構造表, 一般件名規程, 等の各論にいたるまで, 幅広い問題点の指摘があった。

### 1999年12月例会

日 時: 12月4日(土) 14:30~17時

会 場: 神戸市立東灘区民センター

テーマ: BSH第4版の検討 その2

発表者: 吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

出席者: 蔭山久子(帝塚山短大図書館), 北西英里(大阪府盲人福祉センター), 久保恭子(元甲南女子高校図書館), 前畑典弘, 松井純子(大阪芸術大学), 渡辺隆弘(神戸大学図書館), 野口恒雄(佛教大学), 吉田憲一(天理大学), 大國克子, 前川和子(堺女子短大), 田窪直規(近畿大学), 吉田暁史

コピーカタログギングが進行し, MARCの直接・間接利用が常態となっている今日, 件名標目表の役割は飛躍的に大きくなっている。以前なら叫ばれながらもほとんど実践されなかった件名目録が現実に役立つ環境が整ってきている。件名標目表を維持管理する委員会の責任は重大なものとなっている。そういうなかで BSH 第4版が刊行された。BSH4版は果たして主題検索の役割を十分に果たしているのだろうか。発表者は元件名標目委員会の委員として4版の編集に加わったが, そのいきさつを離れて純粋に研究の側面から発表があった。採録方針, 例示件名, かっこによる限定, 分野ごとの共通細目,



シソーラススタイルへの変更，字順配列への変更，SA(see also)参照，説明付参照といった諸点につき，何が変わったのかが論評を交えて報告された。

次に，事前結合形の維持，地名件名の扱い，中黒形式の件名，といった点で変わっていない点も多いという指摘があった。最後に複合語とそのファクタリング規則，Polyhierarchy，体系表示といった点での将来的な方向性について若干の言及があった。

## 2000年1月例会

日 時：1月29日(土) 13:50～17時

会 場：大阪市立阿倍野市民学習センター

テーマ：韓国における資料組織法とマークアップ言語研究の動向

発表者：金泰樹氏(延世大学)，崔錫斗氏(梨花女子大学)

出席：光斎重治(愛知大学)，渡邊隆弘(神戸大学図書館)，尾松謙一夫妻(奈良県立奈良図書館)，北西英里(大阪府盲人福祉センター)，田窪直規(近畿大学)，倉橋英逸(関西大学)，蔭山久子(帝塚山短大図書館)，前川和子(堺女子短大)，韓南洙(大阪外大)，吉田暁史(帝塚山学院大学)，金泰樹，崔錫斗

「資料組織と知識構造化の課題」(金泰樹氏)

### 1. 資料組織の課題

(1)複製物，翻訳・改訂等の派生関係，階層関係，付随資料，続編といった書誌的な関連を体系化する方法がまだ確立されていない。

### (2) CCF の適用

抄録・索引界と図書館界に共通して適用できる書誌的な交換用形式である CCF は，書誌情報だけでなく，一部事実情報も収録できるようになっており，一歩進んで記録形式であると考えられる。

### (3) ネットワーク情報資源の目録

ネットワーク情報資源を記述する方法には，

(1)MARC 形式に統合，(2)多様なメタデータを使用する，という2つの方向がある。後者では，Dublin Core が有名であるが，その表現構造の基礎には，RDF と XML が用いられる。

### (4) 件名標目表の構造

伝統的な件名目録では，細目形式が用いられる。しかし，細目形式では順番を入れ替えないうりかぎりで2番目以後の標目からは探せない。事後結合索引に優位性があるかもしれない。

#### 1)倒置形

有機化学を化学(有機)とするような倒置形が用いられることがある。これについては自然な語順を主張したい。

#### 2)接続詞で結合された形

「孤児・孤児院」や「善と悪」のように「・」や「と」で結合された形がある。これらは各部分を独立させるべきではないか。

#### 3)主題と地名

いずれが優先するという論理的な原則は存在しない。

### (5) 典拠コントロール

現行の典拠コントロールでは，一つの形に統一することになっている。しかしコンピュータ環境では，必ずしも一つに統一する必要はない。多くの異なった形を同じものとしてリンクするシステムを構築することがより重要である。

### 2. 知識の構造化の問題

#### (1) シソーラスにおける定義モデル

シソーラスにおいて分析的定義(analytical definition)を導入する可能性を考えることができる。特定分野内におけるある概念を，被定義項(definiendum)と定義項(definiens)という基本形式で分析するという方法である。

#### (2) 探索用シソーラス

探索者の思いつく用語に対応して，関連概念を拡張連想することが出来るような探索用シソーラスの構築が一つの可能性として考えられる。多数の同義語や類義語，反義語等を収容する大

規模なシソーラスを開発し、種々の用語間の連結関係を利用して、探索者の近くと認知範囲を拡張することが出来る。

### (3) テキスト範疇化

インターネット文書の自動分類と範疇化は重要かつ緊急の問題である。これには2つの方法があり、1つは、特定の分類体系やシソーラスを利用して自動的に分類する方法、もう一つは、対象とする文書群から、用語の統計的処理やクラスタリング手法を用いて、分類体系を自動的に生成する方法である。

#### 1) 分類体系の適用

UDC を用いたドイツの GERHARD や、DDC を用いた OCLC の Scorpion プロジェクトなどがある。

#### 2) 知識分類

知識分類という概念は、WEB から知識を組織化するために、特定主題領域に関する用語を関係構造として組織化した小規模シソーラスである。特定の主題領域に属する用語を選定し、情報専門家によって構造化したものである。

「韓国文献情報学系におけるマークアップ言語の研究動向」(崔錫斗氏)

#### 1. メタデータ用マークアップ言語

現状の MARC による目録作成の問題点として、以下が考えられる。

(1) 基本構造は同じであるが、MARC の種類ごとに細部の形式が異なる。

(2) 熟練司書による作成を必要とする。

(3) 表現できないデータがある。

Dublin core のようなメタデータは MARC 形式の問題点を乗り越えるべく生まれた。

#### 2. 全文データ用マークアップ言語

SGML は文献の構造を記述する汎用メタ言語である。SGML は標準テキストマークアップ言語として、テキストデータベース、コーパス、デジタル文献等の構築に使用されている。

SGML を用いて文書を作成するときの問題点は、その対象となるデータが ASCII であるところにある。ハングルは OCR で読みとることができるのが 97% くらいで、非常に低い。韓国では、ORC はなかなか実用化することが難しいので重要な文献と今後の文献に関しては ASCII 化するが、その他の文献はイメージ形式で保存することがよいと考えている。

#### 3. メタデータ

一般にマークアップされた原文から自動的にメタデータを生成するのは難しく、人間の判断が必要となる。しかし、全文のタグとメタデータのタグは統合し、両者を一体化する必要がある。MARC データは、国家ごとにタグが異なるが、種類はそれほど多くない。しかし今後種々のメタデータを含めると、その形式は非常に多くなる。これを統合するためには、mapping table による方法もあるが、変換は完全にはならない。このような目的のため、XML を利用した RDF モデルが提案されている。

#### 4. タグの標準化

文献をマークアップしていくとき、多くの機関がタグの種類、意味、属性、およびタグと構造間の関係を標準化することが重要である。多くの機関がバラバラにこれらを決めると、データの互換性がなくなる。MARC のような失敗を繰り返さないためにも、国際的な協議と協力が必要である。TEI では、共通スキーマを開発し、そのスキーマによるテキストマークアップのためのガイドラインを作成した。TEI 文献で使用しているタグの種類はおよそ 400 種類であるが、このうちヘッダーで使うのが約 60 種類、各位 s さんになる基本タグは約 100 余種類となる。60 種類で書誌事項ならほぼまかなえる。

#### 5. 韓国における適用動向

韓国では、国家デジタル図書館参加機関を中心に、すでに大量の文献に対して SGML を利用してタグ付けを行い、全文データベース提供

している。国立国会図書館，法院図書館，韓国教育學術情報院などで，プロジェクトを推進しているが，2000年からは本格的に膨大なデータ作成が始まる。このさい，重要な文献のみをASCII化し，そうでないものはTiff形式によってイメージ情報としてもつことになる。

漢字コードの問題があり，日本と中国で作られた書誌と全文データベースは韓国語のデータベースには含めない。Unicodeが普及することが望まれる。

参考文献：崔錫斗，金泰樹 韓国文献情報学界の研究動向『図書館学』75号(1990.9) p.1-7

### 2000年2月例会

日時：2月19日(土)14時30分～17時

会場：神戸市立東灘区民センター

テーマ：BSH第4版の検討 その3：主題検索語としての件名標目

発表者：前川和子氏(堺女子短期大学)

出席：前畑典弘，久保恭子，光斎重治(愛知大学)，蔭山久子(帝塚山短大図書館)，山野美贇子(大阪府大総合情報センター)，渡邊隆弘(神戸大学図書館)，吉田暁史(帝塚山学院大学)，前川和子

BSH第4版については，すでに10月例会(志保田務氏)，12月例会(吉田暁史氏)と，2回とりあげてきた。2月28日(月)に日本図書館研究会第41回研究大会が開催されるが，当グループを代表して前川和子氏が「BSH第4版の検討」というテーマで研究発表を行う。今回は研究大会に向けての最終発表であり，過去2回の発表を総合したものに，前川氏が独自の観点を付け加えて報告した。

今回SAという参照形式が設けられたが，例えば「アメリカ哲学」であれば，SAで「個々の哲学者」となっている。その概念に属する個々の固有名詞への一般的な参照となっていることが多い。しかし，それら個々の固有名詞の統制機能を放棄してよいのだろうかという疑問が起こる。またこの参照が本質的にはNTの一種であることを序説なりで明記してもらいたい。

TTは248語を数える。これらのNDCの各類ごとの分布を調べると，3,4,5,6類への偏りが認められる。2,8,9類等の所屬が少ないのは当然としても，果たしてこれが妥当な分布だろうかという疑問は残る。どういう基準でTTが選ばれたのかを知りたい。

## 日本図書館研究会研究大会グループ研究発表テーマと発表者

### 整理技術研究グループとしての発表(1992年度～1999年度)

1993年3月 第34回研究大会

日時：3月1日(月)

会場：大阪府立文化情報センター

テーマ：NDC9版(案)の検討

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

内容については下記論文を参照。

吉田暁史 NDC9版(案)の検討『図書館界』45巻4号 p.372-377, 1993.10

1994年2月 第35回研究大会

日時：2月28日(月)

会場：兵庫県立労働センター

テーマ：目録法の蓄積と現代的課題 - NCR92の改訂まで

発表者：志保田務氏(桃山学院大学)

内容については下記論文を参照。

志保田務, 北克一 目録法の蓄積と現代的課題 - NCR1987年版の改訂案まで『図書館界』46巻2号 p.66-71, 1994.7

1996年2月 第37回研究大会

日時：2月19日(月)

会場：兵庫県立のじぎく会館

テーマ：NDC9版の批判的検討

発表者：野口恒雄氏(佛教大学図書館), 吉田暁史氏(帝塚山学院大学)

内容については下記論文を参照。

野口恒雄, 吉田暁史 NDC9版の批判的検討『図書館界』48巻2号 p.70-77, 1996.7

1996年11月 第38回研究大会

日時：11月17日(日)

会場：ポートピア国際会議場

テーマ：Michael Gormanにおける目録法上の提言をめぐって

発表者：岩下康夫氏(長崎純心大学)

内容については下記論文を参照

岩下康夫 Michael Gormanにおける目録法上の提言をめぐって『図書館界』48巻6号 p.524-531, 1997.03

1998年3月 第39回研究大会

日時：3月1日(日)

会場：京大会館

テーマ：司書講習科目改訂と資料組織法

発表者：吉田暁史氏(帝塚山学院大学), 田窪直規氏(近畿大学)

内容については下記論文を参照

吉田暁史, 田窪直規 司書講習科目改訂と資料組織法『図書館界』50巻2号 p.84-90, 1998.7

1999年3月 第40回研究大会

日時：3月8日(月)

会場：本能寺文化会館(京都市)

テーマ：「資料組織概説」教科書の比較検討

発表者：吉田暁史氏（帝塚山学院大学）、渡辺隆弘氏（神戸大学図書館）

内容については下記論文を参照。

吉田暁史、渡辺隆弘 「資料組織概説」教科書の比較検討『図書館界』51巻2号 p.84-90, 1999.7

2000年2月 第41回研究大会

日時：2月28日（月）

会場：阪南大学

テーマ：BSH第4版の検討

発表者：前川和子氏（堺女子短期大学）

内容については下記論文を参照。

前川和子 BSH第4版の検討『図書館界』52巻2号 p.86-91, 2000.7

## 勉強会活動

1996年3月～8月

マイケル・ゴーマン関係（ゴーマン執筆図書・雑誌の輪読や評論）

1996年8月

根本彰氏の書誌コントロール論関係

1996年9月

ティレット「著作の関連」についての論文

1997年3月

引用索引関係

1998年9月

渋谷嘉彦氏の資料組織法関係論文について

1998年11月～1999年8月

中村幸雄著『情報検索理論の基礎礎：批判と再検討』（共立出版, 1998）

1999年11月～12月

ヴュスター著 中村幸雄訳『一般用語入門および用語辞書編集法』（情報科学技術協会, 1998）

2000年1月～4月

根岸正光、石塚英弘共編『SGMLの活用』（オーム社, 1994）

TP & Dフォーラム（整理技術・情報管理等研究集会）開催日時と発表

## 者・発表論題

- 1992年度(1992年8月29日~30日)  
 OPACにおける主題検索の問題 上田修一  
 ユーザーサイドから見た図書の主題検索 大塚奈奈絵  
 日本目録規則(NCR)1987年版の規則構造 野口恒雄  
 「Facet」概念と「主題概念」について - 『現代図書館分類法』  
 を求めて - 眞下 勇  
 デューイ十進分類法第20版 - その適応策・工夫を探る 小林康隆  
 1993年度(1993年8月28日~29日)  
 我が国における主題検索ツール統合の試み 北克一・芝勝徳  
 日本目録規則1987年版の歴史的位罫 - 目録法の主要概念に即して - 和中幹雄  
 NDC9版刊行へ - 解決された問題、解決されなかった問題 - 相原信也  
 情報の組織化とBC2の役割 光富健一  
 1994年度(1994年9月24日~25日)  
 CCLの再評価とインターネット 紅露 剛  
 情報アクセスとindexing 山崎久道  
 DDC20版780音楽 - 分析合成型図書館分類表の実務的有効性に  
 ついて - 小林康隆  
 シソーラス構造化への認知意味論的考察 豊田邦雄  
 1995年度(1995年9月2日~3日)  
 書誌的構造・同値概念を焦点に 伊藤 順  
 RAK紹介のための文献解題的展望 松林正巳  
 BSO日本語版の可能性 - 機械可読版の設計趣旨と利用法について - 川村敬一・北克一・芝勝徳  
 『日本目録規則1987年版』以降 - 新原則に対する管見  
 :「改訂版」(1994)を含んで - 志保田務・北克一  
 1996年度(1996年8月31日~9月1日)  
 件名標目における論理関係、特に論理積について 中村幸雄  
 Development of the Music Thesaurus Hariette HEMMASI  
 「索引の理論」は可能か? - 索引理論としてのFugmannの  
 「5命題理論」 - 山本 昭  
 ネットワーク情報資源の組織化と探索 原田 勝  
 1997年度(1997年9月6日~7日)  
 自動専門用語抽出の諸問題 影浦 峯  
 分類法において階層構造と多次元構造を区別する意義 緑川信之  
 音楽資料目録の特性とOPAC - OPACを意識した典拠ファイルの  
 構築 - 伊藤陽子

1998年度(1998年10月31日~11月1日)	
件名標目によるOPACの主題検索	渡邊隆弘
DDC21のチャレンジ - 570「生命科学・生物学」の ファセット構造の検証から -	光富健一
社会メディア情報とPML - 社会における個人電子図書館(PML)と デジタル書誌データベース(dbDB) -	谷口敏夫
1999年度(1999年9月25日~26日)	
複合主題の扱いかたと論理関係 - 関係子の考え方 -	中村幸雄
図書館パッケージにおけるOPACの可能性 - LIMEDIOを 題材として -	兼宗 進
インターネットにおける分類の利用	吉田暁史